

會



報

1958年11月

200

日本山岳會

二百号を迎

えた会報に

島田 巽

会報も二百号になった。昭和五十年十月に創刊されたのだから、二十八年間つづいたことになる。この会報を出すことを提案して最初の編集を引受けた浦松佐美太郎さんから、今日の編集委員まで、この苦勞な仕事を引受けられた人たちに感謝する好機会だと思ふ。

その機会に、すでに三冊が製本されている会報をとり出して、あれこれ読み返してみた。いろいろと個人的な思い出もよみがえってくるし、時勢を背景として会の人たちが頭を悩ました問題なども改めて想起されて、初秋の夜のふけるのも知らぬほどだった。そんな興味を抱かされる一つの理由は、私が入会を許されたのが、この会報の創刊される一月前であつたからで、私にとつて会報は、日本山岳會の身近かな「現代史」でもあるといえるのである。

この会報は、創刊当時の目標のように毎月発行されてきたとすれば、今年の九月まで満二十八年間に三百三十六号目に達した勘定になつて、実は、とくに三百号記念の会報が出てははずだった。いろいろな事情で、その間二百号しか送り出せなかつたわけだが、なかでも戦争で妨げられたことが、最大の痛手で、昭和十六年ま

で比較的順調に進んで来た発行が十七、八の兩年には一年に八回と減り、十九年の七、八月合併号をもって、印刷所すら求められなくなつて休刊となつた。過去の一冊をくらべると、一〇号から三五〇号までの合本だけが、無惨に黄ばくたつて、戦時、戦後の用紙不足を物語っている。それだけにこの万事不如意の時代に、会報を生み出すために、献身的な努力をされた編集者たちに、とくに感謝の念を禁じ得ない。その間に亡き人となつた塚本繁松さんの会務への情熱を、この二百号を迎えるにあつて回想せずにはいられない。

「年に三回の山岳では兎角疎遠になり勝ちな会と会員との連絡を、この毎月の会報で結んでゆくことが出来れば大成功でしょう」と、第一号の編集後記に述べられている。「山岳」が年一回となつていく現状ではとくに会報の使命は大きい。ことに会員の数も多くなつた今日、会と会員を結ぶ絆としての役割も活潑に果さねばならなくなつていく。しかし、会報にこの使命を達成させるためには、編集者に委せつきりでは駄目で、やはり会員からの積極的な寄稿がなければなるまい。私自身、そんなことをいえた義理は全くないのだが、合本のページをひもときながら、つくづくそれを感じたのだつた。あの沈鬱な戦時下にも、紙こそ悪質なものであつたが、よくも、会の先輩はじめ多くの会員が、会報への執筆をつづけたものだと思わされた。なかには今から見れば行軍登山派などもあつて苦笑させ

られるが、反対に、あの暗い空気のおかげで、ホツとして暖い気持を与えられる文章も少なくなつた。木暮さんの「サビタのパイプ」が載つたのも休刊直前の一三一号だつた。期せずして、同じ号に木暮会長急逝の訃報が入り、これは最後の寄稿となつてしまつた。

この二百号が出て、一五一二〇〇号という新しい合本ができることになるが、この一五一号にはフランス隊のアンナプルナ初登頂のニュースが記されており、一五二号には堀田弥一さんが「アンナプルナの初登頂を聞いて」という一文を寄せている。この一九五〇年は、ヒマラヤ八千メートル峰への挑戦が開始された年だから、その後の会報八年間の集積は、その点からも興味深い。その上、会としてもマナスルと取組んだし、京都大学はじめ日本の隊の海外遠征も、ようやく数多くなつた期間にあたるので、会報そのものも、およそ、戦時、戦後とは全く違つた活気にあふれて来た。これまで、外国人の文獻を通じてのみ論じられていたヒマラヤなどが、身近かに感じられ、われわれの仲間の口や筆で伝えられるようになり、それが会報にも如実に反映されることになつた。これは最近の「山岳」にも同様に現れていることだが、古い会報から眼を、この八年間の上に転じたときに感じる嬉しい変化である。

といつて、これからの会報が遠征報告だけで埋められていけばよいというわけではない。夙機関誌「山岳」では、カバリーにくい本會のクラブとしての性格、雰囲気

主要目次

- 二百号を迎えた会報に……………(一)
- ヒマルチュリを目指して……………(三)
- チヨゴリザ登頂……………(六)
- チヨゴリザ初登頂に寄せ……………(七)
- ヒマラヤン・ニュース……………(八)
- エヴェレストの新地図……………(八)
- マナスルに対する反響……………(十)
- ニュージラントの山……………(十一)
- 別宮会長の急逝……………(十四)
- 北田さんの手紙……………(十五)
- 近着外国山岳會報……………(十七)
- 圖書紹介……………(十七)
- 會員通信……………(十七)
- 朝日連峰濡れ歩き……………(十七)
- 能郷白山失敗記……………(十七)
- 二百号に寄せて……………(十七)
- 八ヶ岳中央経路にて……………(十七)
- 飯豊山……………(十七)
- 朝日連峰新潟県側踏査……………(十七)
- 東京支部便り……………(十七)
- 団体登山報告……………(十七)
- 東京のすぐ後に……………(十七)
- 會務報告……………(十七)

に、活気を横溢させることにもなる。はなはだ妙なことが、以上は会報の編集者であつたこともない私が、いわば会報を愛する一會員の言葉として記しておきたいと考えたことなのである。(別宮会長の御通夜の翌日記す)

ヒマルチュリ を目指して

金坂一郎

今回のヒマルチュリ登山を具体化するべく日本山岳会においてヒマラヤ登山準備委員会を開いたのが六月十二日。その第一回委員会において石坂と私が偵察行の命を受けた。

翌日から早速船の手配を始めて見て驚いた。船は八月上旬出帆と聞いたのに、よく調べて見ると七月十日横浜入港で、二十日に神戸出帆だ。とすると十日までに装備食料を集荷して荷造り、その他書類手続一切を完了しなければならず、準備期間は正味四週間しかないことになる。いささかあわてた次第であるが、それこそ乗りかけた船であるから、突貫作業でもやり通す外ない。

私も山登りをやっている者にとつて遭難は最大の失敗である。だから危険防止ということについては、登ること以上に常に気を使っているわけだが、それにしても人智、人力を超えた大自然の現象には太刀打ちできないこともある。まして相手が日本の山と全くスケールのちがうヒマラヤである。思いがけない突発事故がおこらないとは限らない。昔だつたら水盆をかわしてというところなのだから、とうとう出発までに家

族とともに落着いて夕食をとることもできなかつた。石坂など鬚はポウポウ、髪はバサバサ、眼ばかりギョロ／＼して見られたものではなかつた。

たつた二人の登山隊といつても、必要な手続は十数名の大遠征隊と全く同じである。だから隊員にかかってくる負担はひどいものだ。しかし気分的には非常に楽であつた。日本山岳会、あるいは職業上の先輩、同僚諸氏が、後のことは一切引きうけた、安心して行つてこい、といつて下さつたためもある。うつ／＼とした気分やあせるような気持には少しも襲われないですんだ。だから今はかなり遠い旅路を異境カトマンズに辿りつくまでも、いくつもの困難にはぶつかりながらも、極めて自然に経過して来たような気がする。

われわれの計画としては九月初めにカトマンズ出発、二週間ほどの旅でマナスル以来おなじみのブリガンダキ溪谷にベース・キャンプを建設する。ここからヒマルチュリの東北面に対して五週間ほど偵察を行うのであるが、参考資料はほとんどなく場合によつてたびたびベース・キャンプを移すはめにおちいるかも知れず、ほとんど不可能という結論を持つて淋しく帰国することも当然ありうることなのである。

偵察の後には例のサマからラルキヤ峠を越えてマルシャンディ溪谷を下る。マルシャンディは去年コミニニストのトラブルがあつたというのをインドの新聞記者に聞いているのでちよつと気にかかると、ポカラから飛行機でカトマ

ンズに戻るの十月末である。予定通り行くとなれば十一月十日カトマンズ出帆、横浜入港が十二月四日ということになる。しかし仕事があつたヒマラヤ偵察である。予定も何も立たないというのが本当のところである。

七月二十日英国船サンゴラ号で神戸出帆。深田久弥氏の一行が今春ジュガル・ヒマラヤに向かつたとき乗られたのと同じ船である。台風の進路をかわして瀬戸内海を走る。

シンガポールを過ぎると本格的なモンズーン曇りの空になる。時々シャワーのような夕立がやってくる。こんなやつに毎日やられるのがイヤラヴァンが続けるのは大変なことだと思つていたが、カトマンズ沖にさしかかつてから空はずつかり晴れて明るくなつた。シャワーはときどきやつてくるが、それ以外のときは大体晴れている。これがカトマンズあたりのモンズーン気候である。

モンズーンといえ、船員の話によると、今年には海ではモンズーンの来るのが例年より一月も遅くしかもほとんどモンズーンがなかつたといつていいほどおだやかであつたそう。カルカッタの新聞によつて見てもカルカッタなど雨量累計が今年の三分の二くらいである。

德里では毎日水不足が報じられていた。しかしところによつては平年以上の降水量を見る地方もあるし、北部ベンガルでは大洪水に見舞われ、パトナ附近のガンジス河は危険水位の二ポイント下まであるとか、マルシャンディがあふ

れたなどと読むと、いささか心配になつてくる。

カルカッタ到着までの寄港地は香港、シンガポール、ペナン、ラングーン。ペナンでは日本人に会わなかつたが、そのほかの土地では在外公館や商社の方々に大変お世話になつた。ロクに言葉も通じない地方を自分たちだけで歩き廻るのも結構面白いことなのだが、各地で示された邦人の親切は身にしみて有難かつた。

八月十三日午後カルカッタ入港。総領館の大井、茨木両氏の出迎えを受け、恐ろしく厳重なカルカッタの税関もスムーズに通つた。しかし困つたことには、われわれのネパール入国の正式許可が届いていないのである。これがなにかにはカルカッタにおける一切の仕事に着手できない。日本の外貨事情の問題もあつて、一事が万事右から左へと素早く動かない上に、相手がノンビリしたネパールやインドの役所である。こうした仕事にはよほど早くから、時間的見通しをつけた上で準備を進めない、無駄な日時や金を費すことになる。

さて上陸後スペースというホテルに着いた。代々のマナスル隊が使つた関係からここに入つたのであるが、一番安い部屋を注文したら屋上にある掘立小屋みたいなどころにほうりこまれた。これでも二十七ルピー(二三〇〇円)である。これでは大変だと考えたので後で宿さがしを始め、十五ルピーで快適な宿を見つけたことができたが、こうした点旅なれぬものは階分無駄をするものだとつ

くづく思つた。スペースは屋上以外に全館冷房、飯を食うのに昼間から寒隊つきで、夜の十一時には宿泊客は無料入場のキャバレーが始まる。こんなものはわれわれには一切用がないのであるが、よく考えて見ると、こうした費用までわれわれは負担させられていたのである。おまけに今日は禁酒日。しけた顔をして寝床にもぐりこむ。

八月十四日、ネパール入国許可がすてに出ていることを知り、ホツとする。今日は携行装備の揚陸ができるつもりで税関にかけたが、税関の倉庫が一杯になつていり、われわれの船のデッキ・パセンジャーが色々品物を沢山山からついで来ているのでトラブルをおこし、嘆願して何とかして貰おうと思つても肝心の係官がそつちの方に出張してしまつて取りつく島もない。総領事館に挨拶に出かけただけで今日の仕事は終了。途中の本屋でネパール語の会話の本を見つけたのが今日の収穫。

八月十五日、今日はインドの独立祭で休み。今日も仕事にならない。大体カルカッタ滞在中の気温は三十度くらいで東京の夏と大して変わらないが、今日に限つて午後三六度まで昇つた。

八月十六日、ネパール入国の許可は出ているのだが、カルカッタ税関としてはインド中央政府からの指示がない限り、どうすることもできない。われわれの荷物はカルカッタで封印し、ネパールまで輸送してカトマンズのインド大使館が封印の完全であることを確認してから始めて開梱することがで

きる。作業としてはこれだけのこ
とであるが、ネパール政府が探検
隊の荷物を無税でネパール国内に
持ちこむことを承諾した書類をイ
ンド政府に送り、その時からイン
ド政府の事務手続が始まるのであ
る。ところが中央政府の指示がま
だカルカッタに届いていないので
ある。だから通関手続を始めるこ
とができず、どうやら船から揚陸
することだけ承諾して貰った。船
の方ではわれわれに好意を持って
くれ、一番先に揚陸して上げても
いいといつてくれたのだが、
結局荷物が揚がったのは四日目に
なつてしまつた。

八月十七日、日曜日。このと
ろ休日が多くて仕事にならない
が、平日でもこの辺は執務時間、
営業時間が短かいので、時間的に
はよほどねらいをつけて行動しな
いと無駄が多い。もつともこんな
気候のところでは日本式に本気にな
つて働いたら体がもたないのかも
知れない。とに角われわれもひな
く非能率的な仕事をせざるをえな
い。はめににおちつたが、そのくせ
結構忙しいことは忙しい。カルカ
ッタ見物などほとんどしてゐる暇
はなく、夜まで残業だ。見たもの
といえば次の日曜日に一時間ほど
動物園をのぞいたくらいのも
で、まことにせわしない生活を送
つてゐる。もつとも、ひどく煩雜
な手続きを要する海外登山を、立
派な指導者を得たとはいいな
が、経験もないのに独力で処理し
ようというのだから、このくらい
は当然の努力である。

八月十九日、腹の調子はおさま
つてきたが仕事の方は相変わらず空
まわりの無駄骨折りが大部分。こ
れが二十二日まで続く。
二十三日に仕事は一転した。中
央政府からの指示がカルカッタ税
関に届いたのである。通関代理店
の話では書類が受付けてから二、
三日で仕事が片づくとの話。それ
が突然のこと今日一日、それも土
曜日の半ドンだというのに現場作
業は一切終了、もう荷物を持出し
て宜しいということになつた。急
転直下とはこのことであらう。税
関としてもお百度参りに日参する
われわれに同情してくれたのかも
知れない。通関業者の予想を裏切
つて早く片づいてしまつたのであ
る。

〔二〕なる、われわれも一層あ
わてて飛びまわらなければならな
い。飛行機や汽車輸送の手配、や
り残した挨拶まわりを片づけるこ
と。ぼたぼたとかけまわつてデリ
ー行きの急行列車の一等寝台にお
さまつたのは二十五日の夜。一等
車とはいふもののインドの汽車は
すさまじい感じがする。窓は全部
鉄格子がはまり、ひどく厳重に戸
閉りができるようになつてゐる。
ベットはさすがに広くて日本の三
等寝台のような窮屈さは見られな
いが、とにかく恐しく殺風景なの
がインドの汽車である。しかし今
度の旅行に出発して以来、本当に
旅に出るといふ感じがしたのは、こ
このハウラー駅の出発である。こ
れでいよいよネパールへの旅が始

まるという感じがひしひしとせま
り、すつかり嬉しくなつた。
しかしこの汽車旅行では、われ
われは寝具の持ちこみを忘れてい
たので、私は引きかけていた風邪
をすつかりこじらせてしまつた。
インドの汽車の一等車は夜は寝台
車になるのであるが、寝具の用意
はない。こうしたのは予め調べ
て承知はしていたのであるが、汽
車に乗りこむ前は寝具の心配ど
ろではなかつたのだから止むをえ
ない。
夜が明けても汽車は相変わらず単
調な平原を走つてゐる。どこまで
行つても平らだ。登りも下りもな
い。丘も見えない平原。夜明けが
たひどいスコールに襲われる。す
さまじい土砂降りだ。キャラヴァ
ン中にこんなやつを食つたらたま
らないと思う。ところどころ大き
な湖を見かける。よく聞いて見る
と湖ではなく、洪水のなごりの溜
り水だそう。前途を考えるとゆ
ううつにならざるをえない。
二十六日朝八時過ぎパトナ・ジ
ヤンクシオンに着く。荷物をおろ
し、駅の食堂で一息ついた。食事
は一応英国式であるが恐い料理
だ。発熱している私にはほとんど
喉を通らない。石坂を荷物の見張
りに残し、ぐらぐらする頭をかか
えてインド航空の事務所にかつて
ける。若い事務員が非常に親切に
してくれ、トラックは金がかか
るから牛車を使えと世話をやいてく
れた。お札にボールペンの少しこ
われたやつを進呈したら、なお一
層親切に、行く先々のことまで色
々とアドヴァイズしてくれた。

所を荷を運びこみ、それからグラ
ンド・ホテルのベッドにひつくり
かえつた。
パトナはインドの古い都であ
る。そして街全体が古ぼけてゐる。
民衆の家はほとんど廃墟としか見
えない。われわれのホテルも相当
金のかかつた立派な構造の建物に
はちがいないが、手入れも余り行
きとどかないお化屋敷みないなも
のだ。街の中で立派だと思えるも
のは、イギリス人が自分たちのた
めに建てた学校や宏荘なマイダン
（芝生の広場）だけだ。こうした
ものを見て歩く、色々と考えさ
せられるものである。
マラリヤの予防薬を飲み始め
る。カルカッタは暑すぎて蚊やは
えの生存を許さないと、不潔な
割に極めて少かつた（もつとも南
京虫はタクシイの中に入りようよ
しっている）。しかしパトナでは蚊帳を
つらなければ寝られないほどだ。
後で聞いたところによると、カト
マンズあたりでもマラリヤはほと
んどなく、ジャングルから出てき
た連中が少数持っている程度だそ
うである。

八月二十七日、体温下がり始め
幾分楽になる。カトマンズも近い。
新聞原稿を書き始める。
午後インド航空の事務所にてか
け、飛行機の切符を作つて貰う。
それからグラナリといふ半球形
煉瓦の塔に登り、街とガンジス河
を眺める。街もここから見下ろす
とかなり奇麗に見えるが、ガンジ
スの方は実際よりも小さく見え
る。ガンジスの大きさは地上から
見たのではよくわからない。実際
に舟で渡つて見るか、飛行機から
でも見下ろすよりほかない。カル
カッタ到着早パトナにおけるガ
ンジスの水位は云々という記事を
新聞で見て心配して来たわけだ
が、今はそうした心配もなく静か
に流れている。流れの早さは思つ
たより早く、流される舟がかなり
の早さのにくらべ、登つて行く
舟は帆を一杯にはらませながら遅
々として進まない。
八月二十八日、飛行機は午後二
時四十五分出發予定だが、八時四
十五分までに事務所へ来てほしい
という。ほとんど手続らしい手
続きはないのだが、半日しばられ
てしまふことになる。飛行場の税
関の係官に面接。大変な御荷物で
すな、といわれただけ、そのほか
外人登録証を警察官に渡せばイン
ド出国の手続きは完了。入国にく
らべてえらく簡単だ。
乗客はネパール人、インド人ら
しいのが大部分。西洋人はアメリ
カ人らしいのが多い。われわれの
飛行機はわれわれの荷物が全部積
みこまれたので、半分貨物機の様
うになつてしまつた。予定より十
分も早く離陸。どこでも見渡す限
り平原と河だけ。
国境の山地にかかる」と気流が悪
く、少しゆれ始めた。遠く左手前
方に、雲のあい間に白雪の峰が
ちりと見える。まさにヒマラヤで
ある。山の名はわからないのだが、
ネパールまで辿りついたのだとい
う感じがひしひしとせまる。
山地が終わるとすぐカトマンズ
だ。パトナから一時間で着陸。マ
ナスル隊でなじみになつたビナヤ
君が迎えてくれる。飛行場からガ
ネッシュ山群がちりと頭を見せ

る。

カトマンズは標高約一、三〇〇米。日射は強いが、気温はぐつと低い。インドから来ると丁度冷房した部屋に入った感じが、ことに夜ジョブで街を飛ばしたりなどにすると極めて快適だ。ネパールの顔つきもインド人よりはなじみやすいので、一層親しみを感ずる。

通関が明日になったので、手荷物だけ持ってパス・ホテルに落ちつく。パスといつても英語の宮殿ではない。土地の言葉で石という意味だ。石にも色々あるし、寶石に近い上等な石の意味なのだが、宿としては余り上等ではない。しかしマネジャーは親切で色々気を使ってくれる。

インドではわれわれは西歐風の生活をし、隣の人と口をきく必要もない個人主義が普通だったが、カトマンズではやたらに人が訪ねてくる。

夕食後新聞記者が訪ねて来た。前後合わせて三名やつて来たのであるが、三名が三名とも紙も鉛筆も持たない。

紙といえば傑作なのは、石坂がボーイに便所に紙を備えろと命じたのであるが、なかなか意が通じない。やがてボーイが持つて来たのは真鍮の壺に入った水である。これで紙の代用にするというわけなのだが、流石の石坂もこればかりは試みなかつたようである。

インドもそうであるが、カトマンズの街には余り紙屑がちらかっている。感心だと思つていたら紙屑がちらかるほど紙が普及してないのださうである。ホテルにも紙屑籠が備えてない。

シエルパには二十八日にカトマンズに来るように電報しておいたのだが、まだ到着していない。入国問題か何かで面倒でもあつたかと心配になり、来られないようたつたらすぐ電報するようにギャルツェンのところに打電した。

しかしその心配は幸いにして杞憂に終り、翌二十九日朝、ギャルツェン・ノルブ、ラクパ・テンジン及びパサン・テンパの三名が元氣な顔を見せた。汽車の便が悪く遅れそうなので、カルカッタの総領事館とカトマンズのインド大使館氣付で電報しておいたそうだが、まだ電報が私の手に入らなかつたのであつた。早朝二時にすぐ近くのジャンタ・ホテルに着いたそう。ジャンタは日本語にすれば大衆ともいう二、三級下のホテルである。ここがシエルパの定宿なのである。

今日、八月二十九日、カトマンズではラクシェ・バンドンというヒンズー教の祭日。幸いインド大使館は休みでないで連絡をとり荷物の封印検査を受けたて引取る。

ここまではよかつたのであるが後がいけない。翌三十日は土曜でネパールでは休日。次の日曜日は普段ならば平日であるが、この日に限り、国王が二カ月ぶりで外遊から帰国されるので役所は休み。またその翌日は国王帰国祝賀会の慰勞として休日とする。四日連続してお役所は門を閉めてしまふのである。

この間登山準備の方は石坂とシエルパの手でどんどん進められ、二、三日であらかたの準備は終つてしまつた。後はただ入山料を納めて、山に同行する連絡官をきめて貰うだけである。ところが休み続きで、その交渉が始められないのである。

そんなわけでシエルパの方はすぐ仕事がなくなら、ぶらぶらしてゐたのであるが、そうしたときギャルツェンから聞きだしたイエティ(雪男)の話を紹介しておこう。イエティというのはシエルパの言葉で、チベットではメティ、ネパールではソカパという。またイエティは三種に分類され、一番大きくて人間よりも大きいくらいのもので、中型の、人間でいけば十五才くらいのもので、ミティといふ。一番小さいのはチユティといふ。これは普段段のように四足で歩くが時々二本足で歩き、物を食うときは手を使つてつかむのさうだ。イエティとミティの色は黄色で、チユティは黒のようだと。この春米国の雪男探検隊が見たのはティエルマ(ネパール語でボンジャングリ)というもので、二本脚で歩くが、雪のない低地のジャングルに住み、イエティとは別の動物だそうである。色はダーク・ブラウン。これは蛙を好んで食うので、蛙を餌におびきよせて、ワルン溪谷の高度八千呎くらいのところで、夜の十二時にシエルパ一名とポーター一名とが実際に見たのである。

そして昔は多くの人がイエティを見たり、またイエティに殺されたという話をよく聞いたが、今の世のシエルパでイエティを見たものは少いさうである。日本でも昔はよく狐や狸に化かされたという話を聞くが、このごろの狐や狸は神通力を持たないようである。あれこれとを思いつくべ、そして長年ヒマラヤを歩いている現代のシエルパたちが一度もイエティを見ていないことを知ると、われわれがイエティに出会う機会は極めて少い。われわれは国を出るときに、今度は秋の山行であるからイエティを見るチャンスが多い。写真でもとつて一儲けしてこいと悪童どもにそのかさされて、安くもないカメラを買いこんで意気込んでやつて来たのであるが、統計的に判断してわれわれが金持ちになるチャンスは極めて少いような気がしがつかりだ。

インドから持ちこんだ金はカトマンズではそのまま通用するが、奥地に入るときはネパールの金を持つて行かなければならない。それも紙幣では通用しない土地が多いので硬貨をかついて歩かなければならぬ。そのため遠征隊では一、二名のポーターが余分に必要になるくらいである。

朝のうち一〇ルピー両替させたら一対一、六二〇〇という割合好都合なレートであつたので、しめたと思つて両替に出かけたが、午後にはもう一、六〇七五と下がつて来た。両替屋は板敷の店に金があちこちこるがつかつていふというひどくお粗末な店舗だが、それでも十万や二十万の硬貨はいつでも用意しているらしく、両替はその場で成立した。しかし硬貨はごつちやになつてズダ袋にはうりこんであるので数千枚を勘定して受取るまでには結構一時間もかかつてしまつた。

八月三十日、今日土曜日でお役所は休み。そしてヒンズー教のお祭りでもある。この一年に死亡者あつた家では、男の子を飾り立てて街を練り歩き、死者の冥福を祈るものらしい。

カトマンズ唯一の在留邦人遠山一郎氏がお祭りの見物でもとさそつて下さつた。狭い路地に群衆がひしめきあつてゐる。異様な服装で奇妙な風に飾り立ててゐる。たしかに遠い国にやつて来たという感じがした。ここでもみくちやにされていてコレラのこと心配になつて来た。カトマンズにコレラがはやつてゐるということはずでに船の中で聞いて氣にしてゐたのであるがこうしてアジアの国々を旅行して一番心配なのは伝染病である。ここでは統計といふものがないから確実な死亡者がかめないが、遠山氏の話では今度の流行で五百人くらい死んだのではないさうかと。隔離など十分には行なはず、また年中行事みたいなものだから、ばたばたと人が死んでも街の人はさほど驚かないらしい。

われわれは街を見物して歩く時間をほとんど持たないが、また実際に歩いてみてもさほど興味は感じない。ただ異様だといふ感じだけが残つてゐる。私にとつてむしろ飛行機から数秒間ちらりと見える白雪の山の方が、はるかに強烈

な印象を与える。

八月三十一日、国王帰国の日。朝のうち日本に留学したことのあるクリシユナ君がわざわざ式場の入場券を届けてくれる。ビナヤ君、シエルパともども見物に出る。

赤い服を着た兵隊が奇麗だ。ただし数は余り多くなく、一個中隊ぐらいのものだろう。国王が玉座につくと祝いの花や額を捧げるものが後を絶たない。国王はそれをものうい顔で受けとつて、すぐさま待従武官に渡す。長々とした演説がくりかえされる。

午後は食料や不足した器具の買出しに出る。鍋を買つたら数で値段をきめるのではなく、はかりで目方をはかつて値段をいつた。

九月二日、午後から外務省にでか来る。ネパールの役所は午前中外来者が訪ねることはできない。午後の食事後でなければならぬ。だからうかつかすると一日かかつて何もできないということもあるのである。登山係に会つたらヒマラヤ協会に連絡したか、さもなければ先ずそこへ行くべきだという。ヒマラヤ協会というのはシエルパやポーラーを供給しようというところらしいが、まだできたばかりで全然仕事をしたことがないらしい。とてもこんなところに重要な夫人の注文などできない。だから私はヒマラヤ協会へ行く義務があるのですかと登山係に質問したわけだが、彼は好都合なのだ、という返事。ここ以外にわれわれの事務を受けつけてくれるところがないので、やむなくヒマラヤ協会なるものを訪ねた。

それは小さな宿屋の二階にあつたが、こちらの訪問に対して忙しくて会えないから明日来てくれとのこと。どうせ明日の午後まで仕事にならないのだからと、ほかの仕事に移つた。

この夜土地の旧家シャハ氏から食事の招きを受けた。石坂の話によるとネパール料理はインドと同じくひどく辛いもので、われわれにはとても食べたものではないとのこと。覚悟して出かけたわけだが予想に反して大変おとなしい料理ばかり。焼飯に色々なおかずがそえられているもので、日本のおそうざいといふ余り変らなく、久しぶりにおいしい食事を頂いた。たネパールの風習で面白いのは、食事は客の分だけ用意せず、家族たちはわれわれのまわりに立つてあれこれとすすめるだけである。ちよつとピンとこないところもあるが、こうした風習なのだと思えればさほど気にもかからぬ。

九月三日、ヒマラヤ協会を再び訪ねる。相手の言い草を聞いて見ると、協会は公けに設立されたもので、ネパール入国の遠征隊は協会のシエルパを使わなければならない、これからはダージリンのシエルパはネパールに入れないのだという。但し今回に限りあなたのシエルパを一時的に協会に登録して、協会のシエルパを使った形にして、協会のシエルパ登録料として一名につき十ルピー頂きたい。いろいろとやり合ったが、面倒くさくなつたのでシエルパを呼んで意向を聞いてみたが、彼等もてんで受け付けない。何かカラク

リが予想されるのであろう。確めて見るに協会としてはまだ一度も仕事はしていない。われわれが最初のトラブルにまきこまれた犠牲者なのである。登山係の話と協会の話との間には食い違いがあり、その点作意が感じられる。

さんざんやり合ったあげく一諸につれだつて再び外務省に行く。ここでもシエルパの登録問題で話が少しも進展しないが、リエヅン・オフィサー(連絡官)の名前は内定しているとのこと。ゴバル・ラジ・パントといふ二十三才。あとで聞いて見るとCIDのおまわりさん。うっかり油断はできない。

ホテルに引きあげてしばらくすねて来たヒマラヤ協会の連中が訪ねて来た。約束があるから会えないというといつても待つてい。大分たつてから食堂において見たら役員と称するのが三人来ていた。会長を除く全メンバーなのだ。昼間の話をくりかえすだけだ。責任が持てないなどという言葉をやたらに入れて、いわば強迫に來たのである。話の途中で一体私への御用は何ですかと聞きおつたら、そそくさと帰つて行つた。

八月四日、役所へ行つて二日も無駄足を食い、そのほかの時間にはがやがやと得体の知れない人間がやつて来て仕事もできない。今日こそ何とか片づけたい。明日はまた祭日だし、明日には土曜日は休み。意を決して外務大臣に会つて直接話して見ようと考へた。ちよつとカトマンズ到着以來まだ大臣に挨拶する機会がな

かつたので、挨拶をかねて衷情を訴えることにした。

役所へ行つたら大臣はすぐ会つてくれた。立派な髪をはやくした人だ。何時出発するのかとの問いに明日出発したいと希望しているが、トラブルが多くて弱つていてと答え、それをかたはしから並べ上げた。聞いていた大臣はそうしたこととは問題ではない。しかしこの次からはヒマラヤ協会のシエルパを使うべきで、さもないと政府としては問題がおこつたときに責任が持てないのだと説。将来の問題はとも角として、この場はこれで片づいた訳だ。登山係も一諸にかしこまつて聞いていたので、二千ルピー(十五万円)の入山料とひきかえにすぐネパール語のお墨付きを発行してくれた。

ソロ・クンパあたりからいきなり山出しの、英語もほとんどしゃべれないシエルパがダージリン・シエルパなみの働きをして、その上問題がおこつたら政府で責任を持つてくれるというならば、われわれ登山者にとつてもこれほど好都合なことはない。しかし街のうわさを聞いて見ると、理想からはいささか遠い現状のようである。

またビナヤ君の話によると、今まで欧米人の隊にトラブルを聞いたことがなく、税関にしてもほとんど開帳も要求せず、至つてスムーズに山へ入つて行くのであるが、日本人の隊に限つて面倒な問題がおこつているのだそう。いづれにしてもわれわれのトラブルは一挙に解消した。シエルパとナイケ(人夫頭)を呼んで明朝出発の段取りを打合わせる。予算

をもう一度検討して最終的に必要なネパール貨幣を調べて両替屋に行く。それから自分の携行装備を整理、東京への報告を書く。

九月五日、山へたつ日。三時ごろから降りだした雨は霧雨になつている。今まで夕立はたびたびあつたが、こういう持続する雨は初めてだ。しかしカトマンズのときよりはりの説によると、雨の日の出発は幸いもたらさうだ。嬉んで出発しよう。

三十九名のポーターは早朝から集合、八時すぎにはシエルパともに出発した。われわれもそろそろ腰を上げて、後を追わずばなるまい。(九月五日、カトマンズにて)

偵察を前にして

石坂昭二郎

九月十九日ナムルルにつきました。ここにしばらく落ちてナムルルの谷、リダングの谷を探る予定。部落民からの聞きこみによればこれらの谷には大部高いところまでカルカ(チベット式放牧場)があり、相当の可能性がありそう。

まず最初にナムルルの谷を探り、もし可能なナムルルの谷からリダングの谷へとも考えています。うまく乗越せたら快適だろう。なんでも夢のようなことを考えています。現在までのところではすべてが快調に、しごくスムーズにペース・キャンプに到着したというところ。体のコンディションも五三年の時よりも遙かに快調です。あとはただ存分に歩き廻るばかりです。(松田宛)

チヨゴリザ登頂

京都大学登山隊は八月四日カラコラム山脈のチヨゴリザ(七六五四米)登頂に成功、桑原武夫隊長加藤泰安、藤本正夫三氏は九月十五日空路羽田に帰国し本会からは別宮会長、松方副会長らが出迎えた。ここにかがげるのは、八月二十四附朝日新聞紙上に掲載された桑原、藤本両氏の手記で特に朝日新聞社の許可を得たものである。なお京大隊はチヨゴリザのほか、コンダス・ピーク(六七五八米)およびカベリ・ピーク(七〇〇〇米)の初登頂にも成功し、また第四キャンブ附近で昨年遭難したドイツのヘルマン・プールの遺品を発見し、プールの未亡人から捜索を依頼されていたイタリア登山隊に手渡された。

桑原 武夫

八月四日午後四時半ついにチヨゴリザ(七六五四米)の初登頂に成功した。一九〇九年大部隊でバルトロ水河に入つたイタリアのブルツ公の攻撃をシリゾけたこの処女峰は、昨年オーストリアの果敢な登山家、ナンガバルバットの単独勝者ヘルマン・プールの最後の氷壁から転落させて生命を奪つたが、ついにその頂上をゆづつたのである。

七月三十日の第一回の攻撃の成果をベースキャンブで私たちは待ちわびていた。ようやく八月二日の夕刻、岩坪、芳賀の両隊員が下りてきた。明らかになつたことは

第一回攻撃は予定より一日遅れ七月三十一日に行われたが失敗したというのである。

チヨゴリザのルートは二つある。一つは今まで私たちのとつていたもので、そしてヘルマン・プールが採用したものが、ドームの困難なトラバースのため荷上げに人夫を使用出来ず、また時間を喰うのが欠点である。もう一つ、つまり三十一日の退却路は、アブルツ公が採用したもので、これは遠回りになるが、ゆるやかな登りで、ポーターを使用することが出来る。私たちは三十一日の経験からこれを採用して正攻法に出ることに戦略を変えた。つまり従来の第三、第四キャンブはこれを撤去し第二キャンブ集積所を正式の第三キャンブとし、新たに水河上に第五キャンブ、コル直下に第五キャンブを設営し、そこから攻撃しようとするのである。準備に数日を要するので第二回攻撃は八月五日とするという報告であつた。

五日の三時すぎ、今川隊員がポーター一人を伴つて下りてきた。連絡か? 急いで出迎えるに「やりましたよ!」天候悪化のきざしをみて、登頂隊員は第五キャンブが出来るとすぐ、一日くりあげて四日攻撃に出たのであつた。藤平、平井が主尾根を登つてゆくのが第三キャンブからはつきり望見できるのである。やがて二人は最後のピナクルの脚下に出た。三十分後二人の姿は頂上にあつた。八日ベースキャンブからは休養中の脇坂、岩坪、芳賀の三人が人夫ともなつて迎えに出た。そして全隊員は帰つてきた。

藤平 正夫

七月三十一日の第一回攻撃失敗の原因はルートが長すぎたからである。いかにもブルをもつてしても、あの路では絶対に頂上までとどくはずがない。しかも彼が引返した地点から上が、チヨゴリザの最も悪く時間を喰う個所である。予定より一日早く前進キャンブを作つた私達は、八月四日第二回の攻撃をすることに決定した。すでににはじまつているモンスーンの天候は不安定そのもので、一日も早く攻撃に出ることがこの際の最良の方法と考えたからである。

第五キャンブ(六七〇〇米)出発午前四時五十分。コルまでは一気に四十分で登る。高度差約二百シユ。コルで酸素をつけ前回攻撃のシユポールをたどり、酸素集積所で二本(うち二本は半分くらい消費している)を補給。岩尾根を目ざして登る。距離の錯覚は、ヒマラヤの常としてよくいわれていたが、このチヨゴリザほど錯覚の多い山は余りないだろう。岩尾根下までの雪の急斜面の意外の長さにすでに相当の誤算を生じたことをさとつた。私は平井と相談してこの調子では途中から酸素の切れることは決定的だが、その場合はあくまで酸素なしでも頂上を目指すことにした。

雪は表面クラストしているが、体重をささえるには足りず、下はサラサラの粉雪で、時としては腰までもぐり、この上ない消耗を強いる。アブリツチの引返し岩尾根は峻しく、かつガラガラの不安定な岩で、とても直登し得るもの

ではなく、左寄りの雪の斜面を登る。スレートのような岩盤に四十—五十センチの積雪、時とどきは腕までもつかえるような峻しき。雪崩の危険は十分すぎるほどわかっているが、私たちははしやかにむに這い登つた。

二本半の酸素はすでに使いきつた。しかし私たちにとっては、酸素はもはや決定的な登攀用具ではなかつた。頂上岩尾根につづく雪の急斜面は前にも増して不安定な悪雪で、先頭の平井のラッセルが何の役にも立たず胸までもぐる。酸素が切れてから約三時間で頂上岩尾根末端にようやく這い上つた。反対側から吹き上げる寒風と思わず身体がふるえる。荷を置いて早速頂上に向う。二十米ロープ一ピツチ半、最初の一ピツチの終りで平井が私にトツブになつて頂上へ登つてくれという。

私がトツブになつてガツチリした岩を切り切ると、頂上が目の前にある。ふれたい欲望を抑えて平井を確保する。ふと目をドームに移すとプロツケン・モンスターが出てくる。片手を振るとプロツケンの影も動く。思はず平井に十六ミリと怒鳴つたが、彼は何のことかわからぬらしい。二人で頂上に立つた時はもうプロツケンが消えていた。

頂上は小さな岩で、二人で立つには小さ過ぎた。頂上の前で手を振りあつて一語に頂上の岩を踏んだ。午後四時半。「おめでとう」と声を合せていた時、私は涙が胸につかえた気がした。私はそれをふりはらうようにして「花嫁(ブライド・ピーク)は足でふれ

るもんじやないよ。手で抱くものだ」といつて頂上の岩を手で抱いて見せた。胸をつくような嬉しさに万歳を叫ぶ。

頂上発五時。天幕に着いたのは午後十時半、約十七時間四十分、うち酸素使用六時間のアルバイトであつた。

登路を発見

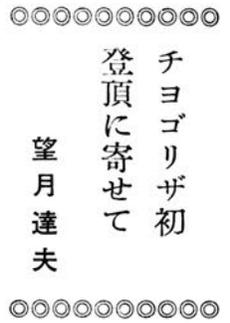
ヒマルチュリ先遣隊

ヒマルチュリ登山先遣隊金坂一郎、石坂昭二郎両氏は十月二十八日カトマンズに帰着し「途中二回も地元村民の妨害をうけたが、予定通り初踏査を行い有望な登頂コースを発見した」とUPI記者に次のとおり語つた。

明年の本格的な登山のため踏査を目的とするこの先遣隊は九月カトマンズを三人のシユルパ、三十九名のポーターを伴つて出発、十七日旅行のうちリダンタ部落で「ネパール政府の発行した登山許可証など認めない。神聖な山に近づくことによつて悪病、飢餓などが生ずるから」という迷信的理由で登山を拒否した。またナムルリでは十日間止められ約二万二千元の現金と約二万八千八百円のラマ寺への供えものを出してようやく通過した。ナムルリのチベット人はネパール政府の命令は受けない。もし強行するなら殺すと脅かした。このため時間を浪費し踏査の時間が不足した約六千五百米で登り、残る約千八百米を非常に急でむずかしそうだが、登頂の可能性はあると思う。明年本隊の登山をすすめる。

チヨゴリザ初登頂に寄せて

望月達夫



一九五八年のヒマラヤも前年に引きつづいて活況を呈した。ガシヤール第一峰（ヒドゥン・ピーク）（八〇六八米）がアメリカ隊によつて初登頂されたほか、チヨイ・オユー（八一五三米）はインド登山隊が第二登頂に成功、ガシヤール第四峰（七九八〇米）イタリヤ隊により、ラカポシー（七七八八米）はイギリス・パキスタン合同隊により、ハラモシユ（七三九七米）はオーストリア隊によつてそれぞれ初登頂された。しかし、難攻不落を誇るダウラギリは今年もスイス隊を頂上下五〇米の地点から撃退した。こうしたなかで、わが京都学土山岳会のパーティによるチヨゴリザ（七六五四米）の初登頂はまことに堂々たる記録であり、永くヒマラヤの登山史に残るものであることはいふまでもない。

この機会にあたり、私はいかねからチヨゴリザについて知りたかと思つて二、三のことについてK・メイソン教授にきき合はしたところ、この程懇切な返事に接したので、同好の士の参考にもなると思ひ、ここにそれを紹介しよう。

①チヨゴリザは周知の通り Chogolisa と綴るが、S の発音は従

来新聞に発表されていたのが正しく「サ」ではなくて「ザ」である。メイソンに従えば、正確にはチヨゴリザとのぼして発音する (Teasa) (この点は京大の人々の意見を改めてきいてみた)

②チヨゴリザは西チベットの方言で、ラダークか或いはバルティの言葉だろうという。チヨゴは「大きい」という意味。チヨゴリといえは大きい山である。ただしチヨゴリの「リ」は「山」で「リザ」の場合は「Tigra」だから、T と Lisa には関係はない。

(九月七日付の週刊朝日に「チヨゴリザはチヨゴリの女性名詞で女性の大きい山……」とあつたのは正しくない。この記事には他にも二、三デタラメなことが書いてあつた)

なお、K2 の正式な山名は依然 K2 であつて、一部の者が唱えるようにチヨゴリではなく、それはインド独立後、パキスタンにおいても認められていない。ラダーク人の間では K2 の発音から「ケチュー」とか「チェックー」とかの呼称が伝えられている。

③K1、K2、K3 等の符号がカラコラムの巨峰につけられたのは、一八五〇年代の後半に、これらの山々を遠いカシミールの測量基点から測定した昔の測量員によつてであつた。チヨゴリザは K6 に相当し、その位置と高度とが測定されたのは、一八五七〜九年であることにほぼ間違いない。従つて日本隊の初登

頂はこの山の発見から数えて大體百年目にあたるわけである。一八六一年にバルトロ氷河を測量したゴドウィン・オースティンは、コンコルディアオースティンといふ、上部バルトロ氷河を明らかにしてもいい。

④K6 の近隣を最初にスケッチしたのは一八九二年のマーティン・コンウェイ卿である。彼の平板測量による第二図には上部バルトロ氷河が示されている。彼はまたこの山を「ブライド・ピーク」として記入した。というのは、この氷雪の山がいかにも目をうばうような「白い婚礼の衣裳」をままとつていようように見えたからだ。この山の南東の鞍部を、彼は「チヨゴリザ・サドル」と呼んだ。チヨゴリザという名が最初に現われたのは、この場合である。コンウェイが名づけた山名は「ブロード・ピーク」を除いて、すべて今日では残されていない。ステアケース、「ミーター」、「ゴールドゥン・スローン」、「ブライド」などの彼がつけた山名は、ガシヤール第一峰の別名である「ヒドゥン・ピーク」の場合と同じように、英語の描写的名称や個人名は、ヒマラヤやカラコラムの山々には適当でないという根拠から、インド政府によつて否認された。

⑤アブルツツイ公は一九〇九年にチヨゴリザ・サドルに達し、その鞍部からこの山を攻撃しようとした最初の人であつた。彼はコンウェイのつけた「ブライド・ピーク」や「チヨゴリザ・サ

ドル」の名称をそのまま用い、さらに「チヨゴリザ永河」というのを加えた。一九一二年に南面のカベリ永河から、この山とこの鞍部とを観察したウィークマン夫妻が、チヨゴリザという名称こそ、その鞍部ばかりでなくこの山の名としても妥当であるといふことを初めて示唆した。ただし、一九二九年のスポレトI公は、アブルツツイ公にならつて、彼の地図に「ブライド・ピーク」とか「チヨゴリザ・サドル」の名称を用いた。

⑥この山を「チヨゴリザ」と称することが、インド政府及びインド測量局によつて承認されたのは、一九三六〜七年の冬に、ロンドンで開かれたカラコラム会議の後であつた。メイソン教授は、この会議の準備に数年間は没頭していた中心人物であり、多くのカラコラム探検家の意見が求められた。「チヨゴリザ」という山名はあらゆる人々にうけいれられたが、その意味が何であつたか、誰かが言つたのかも知れないが、メイソンの記憶には残つていないようだ。しかしその名称は四〇年以上もその鞍部に使用されてきた。それはおそらく「大きななにか」であろう。チヨゴルマといえは大きな谷、チヨゴリは大きな山である。そしてこの両者は唯一つではなく沢山に見られる。チヨゴリザは唯一つしかなく、それ故に、その意味がなんであるうとまことに顕著なものである。顕著であること、不変であること、それは一つの山名のなかで

重要な要素なのである。以上がメイソン教授の説明のあらましである。私はこのなかで特に二つのことに興味を感じる。その第一は、チヨゴリザの初登頂が発見の時からおおむね百年目になされたということである。初めて K6 を発見し測定した人が、かの有名な T・G・モントゴメリーであつたか、G・シエルズアトーンであつたか、或いは部下の測量員であつたかは判らないが、その山が百年もあとに当時はカラコラムのことも全く知らなかつた日本人に登頂されたことは、感慨なきを得ないのである。

第二は「チヨゴリザ」という山名を最初に暗示したのがワークマン夫妻であつたことである。ワークマン夫妻はカラコラムに驚異的な足跡を印しながらも、その敘述に誤りが多いことなどが主な原因で、従来イギリスの探検家や地理学者から余り重視されていながつた。しかし、チヨゴリザの山名を示唆したことにおいて、少なくとも大いに名譽を挽回したように私には思えてならない。「Two Summits in the Ice-Wilds of Eastern Karakoram」(1917) を改めて読んでみたいと思つている。

山岳五十二年発行

山岳五十二年は八月下旬発行された。主な内容はカラコラムよりヒンズークシへ(藤田)、南極圏紀行(渡辺)、厳冬の燕から奥穂へ(農大)その他で一八六頁、定価五百円、三十二年度会員未納者へはお送りしません。

ヒマラヤン・

ニューズ

今年のカラコルムに近年にない
 当り年であった。五つの登山隊が
 八千米峰を一つ、七千米峰の残さ
 れた大物ばかりを四峰もまたたく
 間に登ってしまった。これでカラ
 コルム地区でも、未踏の目ぼしい
 山はガツシャーブルム三峰、マツ
 シャーブルム、サルトロ・カンリ
 ー、カンジエット・サル、ディ
 ステギー・サル、バトゥラ主峰
 の程度に減つてしまった。恐らく
 ここ二、三年の間に、これらもす
 べて登りつくされてしまうこと
 なるだろう。

マラゴシ カラコルムの入口に
 聳えているラカポシ(七、七八八
 米)が英国・パキスタン両国の合
 同登山隊により六月二十五日に登
 頂されたことは会報一九八・九号
 に報告したが、これは当初ディ
 テギー・サル(七八八五米)
 を目標とした英海空軍のミッシェ
 ル・パンクス大尉を隊長とする英
 国隊が予定を変更して、パキスタ
 ンと合同で攻撃したもので、登頂
 者はパンクス隊長とパキスタン側
 のザイチ中尉により行われた。一
 九五六年の夏にはこの登頂者パ
 ンクス大尉は、スコットランドの
 マツクルニス、カリフォルニアの
 R・K・アーヴィン、R・スウィ
 ヲトと共に一九五三年のケンブリ
 ヲのルートに従い、モンクス・ヘ
 ヲドを越え七月八日に第六キャン
 プを二三、〇〇〇呎に設け、翌日
 二三、五〇〇呎の地点まで達した
 が爾後悪天候のために放棄したと
 いう記録が残されており、パンク

ス隊長にとつては宿願の登頂であ
 った。

マヒドン・ピーク 世界第十一位
 のガツシャーブルム一峰(八、〇
 六八米)が、ニコラス・ポクリン
 チを隊長とする米国隊により七月
 四日に登頂されたことは既報の通
 りであるが、この登頂により米国
 も八千米の登頂国に仲間入りする
 ことになった。ヒドン・ピークは
 一九三四年の国際遠征隊、一九三
 六年のフランス隊につづく三回目
 の攻撃であり、このアメリカ隊は
 アメリカ山岳会により組織された
 遠征隊であり、この中にはカリフ
 オルニアの前記一九五六年のラカ
 ポシ隊員アーヴィン、スウィフト
 等も参加している。参加隊員はア
 パラチア山岳会誌の Vol. XXXII
 No. 1 (June 15, 1958) によれば、
 Nicholas B. Clinch, Richard K.
 Irvin, Andrew J. Kaufman II,
 Thomas McCormack, Thomas O.
 Nevison, Jr., Gilbert J. Robert-
 is, Jr., Gilbert J. Roberts, Jr.,
 Peter K. Schoening, Robert L.
 Swift の精鋭で編成されている模
 様である。当会では早速アメリカ
 山岳会長オーバリーン氏宛「ヒド
 ン・ピークの成功を心から御慶び
 申し上げます」との祝電を打つてお
 いた。

しまつたために同峰に変更したと
 いわれている。

マチゴリザ ハラーモシユ登頂
 と奇しくも同じ日に京大隊が登頂
 に成功した。既に新聞その他で発
 表されているので、略するが、そ
 の登頂は各方面から注目されてい
 る。登頂隊員は藤平正夫、平井一
 正の両名である。当会ではスカル
 ドウ宛祝電を打つた。

マガツシャーブルム四峰 チョゴ
 リサ登頂の翌日に当る八月六
 日、イタリア山岳会より派遣され
 た登山隊は現在未踏第三位のガツ
 シャブルムの四峰(七九八〇米)
 の登頂に成功した。同峰は七千米
 級とはいえ八千米に二十米かける
 準巨峰であり、その成功は注目さ
 れている。同登山隊の隊員中には
 日本山岳々員、元北大教授のフォ
 スコ・マライニ氏が副隊長で参加
 している。

当会では直ちに在ミラノ、イタ
 リア山岳会本部宛祝電を打つてお
 いたが、これに対し九月九日付左
 記の如く返電があつた。

「日本隊によるマチゴリザ登頂を
 祝す。なお、当会によるガツシャ
 ーブルム登頂に対する祝電を謝す。
 会員各位に宜しく。」

(CLUB ALPINO ITALIANO
 (松田)

伊太利山岳会の近況

(同会々報編集主任ベルトリ
 氏所報による)
 一、本部所在地 Club Alpino Ita-
 liano, via Ugo Foscolo 3, Mila-
 no, Italia (会報編集部 via Bar-
 baroux 1, Torino)
 二、役員
 会長 ジョヴァンニ・アルデン

チ・モリニ(バルマ支部)
 副会長 エルヴェジオ・ボツ
 オリ・パラサツキ(ミラノ支
 部)

同 レナト・シヤボド(イヴレ
 ア支部)
 同 アメデオ・コスタ(ロヴェ
 レト支部)
 三、支部数 二二二
 四、会員数
 通常会員 四九、一五二名
 準会員(フアマリエ)
 二六、七一九名
 終身会員 三、七九三名
 永久会員(ベルベチュエル)
 六〇名

六、定期刊行物
 会報(リウヴィスタ・メンシレ)
 現在は隔月刊
 七、主要刊行物
 (イ)イタリア山岳案内(イタリア
 側アルプス及びアペニン登山
 路の案内記、大体二年ごと一
 巻宛出版。一九五七―五八
 年度は「ネオロビエ地方山岳
 案内」と「アプア地方山岳案
 内」が刊行された。

(ロ)イタリア山岳会避難小舎一覽
 (一八七四―一九五四年度会報
 索引)

八、会費
 各支部は年会費九百リラ乃至
 (会員の使用に供する施設をも
 つ支部)二千五百リラを本部に納
 め、内五百五十リラを本部に納
 め、一般事務費、会報、本部所
 属ガイド及びポーターの保険、
 委員会、避難小舎の補助、遭難
 対策等の費用にあてる。

九、一九五七―五八年度の事業
 (イ)避難小舎七戸新設

(ロ)国際映画年次祭の開催(ト
 レント市と共催)

(ハ)本部または支部が後援または
 組織した海外遠征隊の派遣
 (a)ガツシャーブルムIV(カラコ
 ラム)
 (b)ペルー・アンデス―一九五八
 年度にミラノ、コモ及びトリ
 ノ支部の三隊
 (c)アルゼンチン・アンデス(チ
 エロ・トレ山群)―トレント
 支部
 (d)同地方の初登回数―マウリ・
 ボナツチ
 (e)中央アフリカ―ミラノ支部
 (f)北部アフリカ(タハルラ)―
 ミラノ支部

(ニ)会員の登山
 (a)ギリョーネ氏―コロンビア・
 アンデス(一九五七年中に新
 登または単独登攀三回。一九
 五八年中に新登攀二十一回)
 (b)モンジノ氏―パタゴニア・ア
 ンデス(チエロ・パイン、パ
 イネ北峯)
 (c)ギリョーネ及びグレゴリー両
 氏―ディステギル
 (d)アルプスについては眼さまし
 い登攀はなかつた。(S・H)

二万五千分の一のヒ ヴェレストの新地図

吉沢 一郎

一九五七年度のドイツ山岳会
 年報(第八二巻)が届けられたの
 で開いてみると最後のところに地
 図らしいものが挟んである。(これ
 は殆んど毎年の例になつてい
 る)広げると一つは東部アルプス
 の避難小屋の位置を示した詳細な

地図。もう一つは見てびつくり、エヴェレスト附近のなんと二五、〇〇〇分の一(一軒が二五〇米に相当)の色刷りの地図であつた。大きさは丁度畳半丈。これはとてもない代もはず。はやる心を押えてまずエヴェレストの場所を確かめておもむるに落ちて周囲を見渡して行く。編集はドイツ山岳会、オーストリア山岳会、それにドイツ探検協会がやつている。

地図の名称はマハラランゲール・ヒマール・チョモロンマ(エヴェレスト)となつていて、この次には北西隅にチョー・オユーを入れたゴジュンバ水河図が出るらしい。色は六色で、等高線は黒と青と褐色。明暗には鈍黄と灰色を使い、線と調子の混合箇所は緑色という風になつてゐる。等高線の間隔は二〇米、百米毎に太線が用いられていてわかり易い。

この地図の特徴は狭い等高線のおかげで露岩が簡単な黒線で描かれてゐることで、このために作図者はかなり面倒な作図作業から免かれてゐる。

地図の範囲をみると上方(北)右にエヴェレストとノース・コル(チャン・ラ、六九八五米)であり、西稜上の七二〇五米の肩からロー・ラ(六〇〇六米)に下り、リントン(六九七米)プロモ(七一四五米)を経て六八二〇米峰から国境主脈は北西に消えている。南東隅にパンポチエがあつてタンポチエに至る三軒という文字が欄外に書いてある。

下部にはアマ・ダブラム(六八五米)が中央に控え、南東隅に少しはみ出してバルンツェ(七二二

〇米)が見える。

右にあげた高度は従来のもので多少違ふが、これはこの地図の全体が、新しく決められたエヴェレストの二九〇二八呎(もと二九〇〇二呎)を基準にした結果によることである。それにしてはローツェの高度が變つていないのはどういふわけであるうか。

エヴェレスト、チョー・オユー等を含むマハラランゲール・ヒマール(大嶺の雪の山脈)に関する科学的な調査は既に発端の時代を過ぎて第二期に入つたものと考えられる。特に地質学関係においては未知のところは殆んどないらしい。即ち北側では A. M. Heron (1921), N. E. Odell (1924), L. R. Wager (1933) 南側では A. Lombard (1952), P. Bordet (1954), M. Latreilli (1955), Toni Hagen (1955, 1956) 等が有名。

地図の面からいへば、北側では H. T. Morhead, O. E. Wheeler, Hari Singh 等が一九二一年、一九二四年にやつており、その際ホイラーは既に写真測量をもつてゐる。

南側即ちネパール側については、インド測量局が一九二四年から二七年にかけて測量し、1/253,440 (1/4 呎図) を作った。これは人間の居住地に関する限り完全に使用出来るものであるが、山岳地帯は余り信頼出来ない。

インド測量局はまた一九三〇年に 1/126720 (1/2 呎図) のエヴェレスト近傍図を作つた。それには南はタンポチエ、西はクンプからロールワリンへ越す峠として知られてゐるテシ・ラプチャ、北は主

脈の無水河地域まで、東はクンプカルナ・ヒマールのマカールの東部までの部分が含まれてゐるが、北側と南側では精度にかなりの差異がある。

それから後にエヴェレスト山塊、西、中央、東ロンブク水河、ガンシェン水河及び西カール(ウエスターン・クーム)を含むものが、1/63,360 (1 呎図) のスケールで英国地理学会と山岳会の名で刊行された。これは Siegfried-Atlas 法で作られたもので、地形の表現は優れてゐる。上にはスイスの有名な Charles Jacot-Guillarmod が行った。

一九三五年には Michael Spender が北側の写真測量をやつたがこれは英国地理学会とヒマラヤン・クラブの名で 1/20,000 の地図になつた。範囲はロー・ラからエヴェレスト、ノース・コルを経てラビュー・ラまでである。

一九五三年には、航空写真から 1/500,000 のものが出来、英国地理学会から刊行された。これはエヴェレストの南東域のみで、上部バルン水河とマカールの南西側が含まれてゐる。

この年のエヴェレスト登頂後、Charles Evans はその南西面を測量し、五四年と五五年には Norman Harvie がバルン水河、ボンゲー源域並びにクンプで地形測量を行つてゐる。

大体以上がエヴェレストの近傍が表現されてゐる地図であるが、その南方及南西方面が支脈については満足すべき地図がなかつた。このギャップを狙つて乗り出して来たのが例の「七千米峰のかき

集めだ」という仇名をもつ Erwin Schneider で、Norman G. Dyhrenfurth (Gunter Oskar Dyhrenfurth の息子で、アメリカとスイスの両国籍をもつ) が一九五五年に率いる国際ヒマラヤ遠征隊に参加し、その年の五月と十月にこの地域で測量に従事した。

測量班の主軸は彼で、あとはカトマンズの Viaya Gaja Nanda Vaidya、一九三四年にシェナイダートンガへ行ったことのある Dawa Tondup、タンポチエの大ラムの父の Nima、ナムチエバザールの Nguru、クムドゥツの Tashi と Nima Gyasen、それにパサンの娘とダワ・トンドゥツの許嫁という成り立ちであつた。そして今度の地図完成の直接の協力者の名をあげると次の如くなる。

露岩その他の地形表現をやつた Fritz Ebster。彼はオーストリア山岳会の地図作成に地形学者として二五年間関係してゐる。そういへばフスカラン (Huscarran, 6768 m) を最高峰とする Cordillera Blanca (Peru) の 1/200,000 の地図をみると F. Ebster の名が入れてある。

地名関係は E. Schneider の他に Fritz Müller、それの綴りの修正は Heinrich Harres と共に有名な Peter Aufschnaiter、Richard Finsterwalder 博士は ミンヒェンにある写真測量研究所の立体的自記機で、この地図の原図になる 1/1,000 の図を作る指導者であつた。

なほ補足のために利用した資料は、エヴェレストの北面—M. S.

ペンダーの写真測量(一九三五年)と同じく東面—O. A. ホイラーの写真測量(一九二一年)及び T. ハーゲン写真、バルンツェに至る支脈の東部—Houston Expedition (航空、一九三三年) 及び Guido Magnoe の写真、バルンツェから西の山稜の南面—C. エバンスの写真測量用写真(一九五三年)、チョモロンマ山塊の露岩の描写にインド空軍の写真。

以上で今度の新しいエヴェレスト近傍図の紹介を終るが、最後に Die Alpen und Marcel Kutz が書いた讃辞を引用しておこう。

「近年発行されたエヴェレストの文献の中には多数のかつ素晴しい地上及び航空写真が発表されてゐる。にも拘わらずこの地形測量図の完成は「どうとうわれわれは真実の前に立つた」といふ一つの啓示を意味してゐる。」

(参考文献)

- Jahrbuch des Deutschen Alpenvereins, 1957, Band 82 Erwin Schneider: Mahalangur-Himal. Begleit worte zur Alpenvereinskarte des Everestgebietes 1 : 25000
- Fritz Ebster: Die Chomolungma-Mount Everest-Karte des Alpenvereins
- Der Bergsteiger, Juni 1958
- Hans Hanke: Spitzenleistungen der AV-Kartographie
- The Geographical Journal, June 1958
- G. R. Crone: A Map of Mount Everest, 1 : 25000

「マナスル」に對する海外の反響

マナスル報告書 編集委員会

マナスルの正式報告書第二巻は「マナスル一九五四〜六」のタイトルで日本山岳会編集、毎日新聞社より五月二十日に刊行し、横隊長の署名を添え左記に贈呈した。

▽外国山岳会関係 アルバイン・クラブ、王室地学協会、米國山岳会本部、スイス山岳会グリンドルワルト支部、スイス山岳研究財団、フランス山岳会、オーストリア山岳会、イタリア山岳会、オランダ山岳会、ベルギー山岳会、ドイツ山岳会、スイス山岳会、チリ山岳協会、アルゼンチン山岳会、中國体育總會、ヒマラヤン・クラブ、ブルガリヤ山岳会、マザマ山岳会。

▽ネパール関係 ネパール國王、ヒマラヤ殿下、マーシヤル・カイザリ、シャハ、タンカプラサド・アチャリア前首相、外務大臣、タパ外務次官、N.M.シン外務次官補、ローク・ダルシヤン元國王秘書、クリシュナ・パハドール、ヒナヤ・ラル・グルバチャリヤ。

▽インド関係 ネール首相、インド地質調査所、インド中央氣象台シムルパ・クライマース・アンシエーション、ヒマラヤ登山学校(在ダーヰリン)、M.R.サイダ

ナ氏。
マ山岳会関係個人贈呈先 ロングスタッフ、ハント、ハンダーソン夫人、ブレイクニー(アルバイン・クラブ・セクレタリー)、ティルマン、ヒラリー、バックワード、リッチフォード、ハーディー、オーバリン、ブラバンド、フォイツ(スイス山岳財団理事長)、グルトナー(同理事)、グブラー、ロイトホルト。

これに對し早速各方面よりメッセージが多数寄せられたので、ここに代表的のものを紹介する。

◎ジョン・ハント氏から
私はロイカサスから帰國してすぐ、私のもとに届いた真に美しいマナスルの書に對し、取急ぎ最も温かく貴下の貴大な登山の素晴らしき記念であり、また私は貴下に對し著者としてのこの偉大な成就についてお祝いを申し上げたい。

われわれは貴下が昨年秋百年祭夕食会に來られ、アルバイン・クラブに払われた慶祝を決して忘れません。あの夕食会はなんと素晴らしい集まりだったことでしょうか!! 温かい祈りと最も深い感謝をもうしつ ジョン・ハント ロンドン
一九五八年八月二十七日

Dear Yuko Maki :
I hasten to thank you most warmly for the really beautiful book on Manaslu, which reached me soon after returning from the Caucasus.
It is a splendid moments of your great climb and I would

I like to congratulate you on this great achievement as an author!
We will never forget that tribute you paid the Alpine Club by coming over for the Jubilee Dinner last autumn — what a wonderful occasion it was!
With warm regards and deepest thanks.
Yours very sincerely
John Hunt
26 July, 1958

◎ロンドンタウン氏から
My Dear Yuko Maki :
You are most kind. I have just received your Manaslu. Made more than twice as well come to my congratulation.
Please accept my congratulations once. The success of an Elder Statesman, after 5 years of striving by the J.A.C. must be very welcome to you and you richly deserve success.
Putting two parties of your team on the top is grand achievement. We often think of that delightful evening you gave us at your Ambassador's. Those colour photos were indeed wonderful. I think the illustrations chosen for your book are exceptionally good.
With kindest regards and compliments from both of us.
Yours sincerely
Tom G. Longstaff
I have a wish to take my wife to Japan in the winter

of 1960, if I am still strong enough!
◎ハウル・パウアー氏から
在マニレンのヒマラヤ財団 拜啓、私は本日マナスル登山の報告書を下イン・ヒマラヤ財団に代り受領致しました。私は、おまだほんの僅かの時間しか、この書を読みなたにすぎませんが、貴下の労作になるこの卓越した著書に對し、心からの驚歎の気持ち一杯であります。
また私は残念ながら日本語のテキストが読めないにもかかわらず、まれにみる立派な写真撮影とそれと同様に優れた図版とが非常に多くを私の物語にくれました。私はまたエクスプレッションの實行の入念な正確なそれと同様に描写表示の綿密なことも驚歎します。私はまた科学的貢献と図版とに大きな興味を寄せ、かごの二つに對し、私の心からの敬意を表します。なおわれわれは感謝のほかに、僅かのしるしとして私の著書「Das Ringen um den Nanga Parbat」を同時に発送するべくを御承下せう。

貴下並に貴会及び貴下の御同僚の方々に對し最高の祈りとともに、私共の立派な著作品の私の感謝を繰返すものであります。敬具
ハイムン・クラヤ財団
理事 パウアー・ハウン
マニレン
一九五八年七月二十九日
Sehr geehrter Herr Maki!
Ich habe heute für die Deutsche Himalaja-Stiftung Ihr Buch über die Besteigung des Manaslu erhalten.
Die wenigen Minuten, die ich bis jetzt auf das Buch verwenden konnte, erfüllen mich mit aufrichtiger Bewunderung für das hervorragende Werk, das Sie geschaffen haben. Wenn ich auch den japanischen Text leider nicht lesen kann, so sagen mir doch die ungewöhnlich gut fotografierten und ebenso hervorragend reproduzierten Bilder sehr viel.
Ich bewundere auch die Exaktheit der Durchführung der Expedition, ebenso die Genauigkeit der Darstellung, die beide mit der Gewissenhaftigkeit eines Generalstablers geplant und in Skizzen wieder gegeben sind.
Mit grossem Interesse werde ich auch den wissenschaftlichen Beiträgen und den Kartenskizzen widmen und für beides möchte ich Ihnen auch meine aufrichtige Hochachtung aussprechen.
Gestatten Sie uns noch, daß wir Ihnen als kleines bescheidenes Zeichen des Dankes mein Buch "Das Ringen um den Nanga Parbat" dedizieren, das wir gleichzeitig absenden.
Mit den besten Wünschen für sie persönlich, für Ihren Klub und für Ihr Volk verbleibe ich unter Wiederholung meines Dankes für das prachtvolle Werk,
Ihr ergebener

Paul Bauer
Notar i.R.
Vorstand der
Deutschen Himalaja Stiftung
この外に同様のメッセーシがフ

ギド・レイのあの魅惑的な筆致をわれわれに心行くまで堪能させていた。「ギド・レイについて」の筆者に、一言お伝えしたいことであります。ギド・レイの著書の中には彼の記した数々のエピソードはそののれを拾つて見ても、御説の如く「全巻にみまざる熱情が強く胸を打つ」ものばかりであります。あのような、美に對する繊細な感情の持主にして、しかも華麗なる描写に異常の妙を得たるギド・レイが、時にはエピソードの主人公や場所を想と明記していない。或は想とでないかも知れませんが、そのような場面時々あり、ギド・レイ自身が一面その辺の描写があまりに巧妙に、読者を引付けるような心理描写も詩人であるだけにわれわれ読者もそのエピソードの相手は「一体、どんな人だらう……誰なのだろう……」とツイ一種の詮索の心理に浸されることがないでもなかつたのです。「ギド・レイについて」の筆者もそんなことをお感じになつたことがありませんでした。よしうか。ギド・レイの崇拜者の一人たるクギドもいつたように確かにギド・レイの文章を読んでいると自分も一緒に登つていようような錯覚に引入れられるといつています。それがだけに何の詮索のないライラする感を持たされるのは私だけではないのじやないかと勝手な想像をしていたのです。

ランス山岳会長リュシアン・ドヴィス氏、アメリカ山岳会書記コリン・アルピンソン氏からも寄せられており、ニュージーランド山岳会からは一九五九年版のN・Z・

かつたが一例えはG氏とかこの頃は昔と違つて判然相手の名前も出てくるからその点からいっても

「サウス・ポール」などは面白いとアノルド・ランがいつているのを最近知つて、成程そういえば確かに古い本にはその傾向がよく見受けられますが、何れにしてもギド・レイの文章にはそんなことは例外であつて欲しいような気がしてならないのですが。前置きが長くなりましたが「ギド・レイについて」の講演をされた時は、文字に表わされたものとは違つた、また別の魅力を聴衆に与

「ギド・レイについて」の筆者に

成瀬岩雄

えたものでした。少なくとも私は。あの時のギド・レイのエグイユ・ヴェルト登山の御話は今なお脳裡に新たなものがあります。

さきにマンメリーがジャルプアーの氷河から初登攀を成し遂げて以来初めてこのルートを探つて登つて来たイギリス人の、見るからに頑強そうな、しかも一面冷静なものに似た、この人なら確かに落石の多い、夜でも耐えず落石の音の絶えぬような、あの急峻な壁を登つて来るだろうと思わせる登山隊が頂上直下のテラスで悠々煙草をくゆらせながら一息入れてい

AジャーナルにN・D・ハーディー氏がレヴューを書くことに決つた旨知らせてきた。
◎(イタリア山岳会報リヴィスタ・メンシール一九五八年一

る場面に邂逅した時のギド・レイの心を深く捉へたお話でありました。

予而、マンメリーの著書を通じてこのルートが如何にアルプス一流の悪場であるかということを知っていたギド・レイ自身はその日、一番安易なルートを探つて登つて来ているだけに、否、それよりも実は、この朝、小舎を立つ前深夜に小舎に降りて来た二人のフランス青年の失敗に同情し、アルピニストの修練をくさり論じた程の余裕と自信の程を見せて来たばかりのギド・レイは今、足下に

この名にし負う悪場を現実に見つ、しかもなお、それをたつた今越して来たばかりの見るからに年期の入つたような登山家が、いと何事も無かりしかの如く、しかも傲然たる態度で自分の方を見ているに聊か押され気味を感じながら一言「ひどかつたですか……」と問うた処、この英国紳士はいと簡単に「NOT VERY」と簡潔なる一言と微笑を残しただけで、

数分後に自分が頂上に達して再び振り返つて見た時には既に彼等の一隊はあたかも当初にひよう然と表われた如く、またひよう然と何処へか見えなくなつてしまつていた。一体どのルートを降つたのかそれも判らないが……、このイギリスのベテランに見せつけられた態度との二つの情景をギド・レイ独特の巧妙な心理描写によつて描かれた当日の講演は確かにあの日の「ヤマ」であつたと今なお筆者は忘れられません。が、筆者は最近この話題の主人公たるイギリスの登山隊は Ryan Rochmarter Ridge とその名までエグイユ・プランに附せられているV・E・Rau さんの人であることを発見しました。そしてまたテッシホルンの南稜の初登攀にはウインスロップ・ヤングと行を共にして

二月書評欄載)
依田孝喜「マナスル登頂記(写真)」
これは一九五六年五月九日マナスル(八二二五米)の頂に達する

まで五二年から五六年までの間日本山岳会がたゆまず続けた努力の記録写真である。その出来栄はすばらしい。

(以下先遣隊から第三次登山隊までの隊員数名を挙げその成果を略記したのち)
遠征のすべての場面がこの本の中に正確に写し出されてお、ヒマラヤで八千の頂をめざす各国の平和の競争のうちにあつて日本人が見事に目的を遂げたことを示している。むつかしい日本語のほかに英文の写真解説がついているのは機宜に適している。
これは立派な業績にもおとらぬ立派な労作である。写真は、このあたりの雄大な景色ばかりでなく、しばしば遠征隊の一行や遠くはなれたこの山奥の人情味ゆたかな情景も取り入れてある。
(ジオヴァンニ・ベルトリオ。伊山岳会会報編集主任)

なおマナスル報告書編集委員会では同書の正誤表を作成中で、会報二〇一号に発表予定である。会員各位におかれても御気付の点を当会事務所気付マナスル編集委員会宛御一報戴ければ幸いである。
(松田)

G・W・ヤング氏の計報
ジョフリー・ウインスロップ・ヤング氏が、さる九月六日ロンドロで、八十一才をもつて長逝した。アルプスの輝かしい登山歴を持つとともに、Mountain Craft, On High Hills, Mountain with a Difference などの名著で、われわれを啓発し、感動を与えた同氏の逝去に、心から哀悼の意を表す。
(島田)

ニュージ ランドの山

185回小集会講演要旨

松方三郎

小集會に出て話をしろというので喜んで引き出したのだが、きょうの演題がニュージランドの山登りとなつていたので、はじめにお断りしておきたいが、実は山に登つてきたのでなくただ豪州とニュージランドの旅行をしてきてその話をするのだから、御期待にそむくことになるのをお断りしておきたい。

どうも今度の旅行ははじめから終りまで何だか向うに感じがいられてあるてきたという感じであつた。実は昨年のことだが、豪州に來ないかといわれ知らないところへはどこへでも行きたいという悪いくせがあるので今度行くことになつたのである。昨年アルバイン・クラブの百年祭に出席するため十二月までヨーロッパに出かけたので行けず今年になつてやつと行けることになつたのだが、夏の日本のシーズンを冬の豪州でくらし一夏損をしたような気がするが非常に楽しつた。豪州やニュージランドにすてに行かれた方には話することはないが、飛行機で東京からマニラまで七時間、マニラからダーウインまで七時間

さらにダーウインからシドニーまで七時間で行ける。豪州に行つて認識をあらためたのは土地の三分の一角が沙漠で、全然人間の住めないところだということである。日本をたつときはちよつと空梅雨だなどといつて大ききわがしをしていたが、あんなことは豪州では問題ではない。一年の雨量が僅か九インチとかいうほどで、その土地の大部分は沙漠で、豪州の初期の探検家の仕事はその乾燥した土地とにかして戦ひ歩いたかということであつた。豪州の探検の初期の旅行記は、大変興味をもつて読んだが、水のないところを歩くといつた苦心は実に面白い。その意味で豪州は未開のところが多い。山は二千米程度で、雪もありスキーも出来るそうで、山としてはニューギニヤやボルネオの山とは比較にならないが大陸の旅行は今でも大変面白いようだ。飛行機からその土地を眺め非常に興味をもつた。広い土地にいかにも人間をばらまつかうというところなど日本とは正反対である。シドニー、アデレードと豪州を三週間見て歩いたが、一口にいえば政府のお客なので多少はきゆうくつな思ひをしなければならぬかと思つてはいた。荷物是最少限度にとどめ、リュックサックを背負つてこちらが気軽にシドニーに行つたのだが、豪州の外務省の役人から大変な歓迎をうけてびつくりした。新聞やテレビでもさわがれ、日本でのかえしをうけたわけだが、松方の豪州訪問について「といふくわしいスケジュールの書いたパンフレットまで出来ていて、こいつを見た時

これは大変なことになつたと思つた。床屋に行つたり、一人でめしを喰う時間など全くなく、まさに天馬の旅行だと覚悟をきめた。家を出る時は富士山に行くより簡単だよといばつて出ていつたのだが、さすがにこゝろ正式な歓迎を受けるとなるとリュックサックなど肩にあるくわけにはいかず、しほには閉口してリュックサックはとうとうかきしまつた。しほしほかなか愉快だつた。シドニーにはアークチック・デヴィジョンという外務省に所属している機関があり、こゝで南極探検や基地の準備など一切やつていた。西堀君が南極に行く前一番はじめにこゝをたずね色々インフォメーションを得ているが彼が豪州に行つたのは非常に卓見だと思つた。日本の南極観測推進本部などのように文部省の地下室にくすぶつていたのではなく、立派なオフィスを持つていた。西堀君はこゝでロー氏に会い、越冬が日本で大さわがすほど危険ではないことを教えられていた。南極の観測事業などは豪州では日本とちがつて何年でもやるべきであるという観念でやつていた。豪州では國の仕事として南極をとりあげていたのである。

アデレードに行つた時にモーションを訪ねた。彼はバード亡きあとの南極の第一の先輩だがもう七十才をこえ、一九〇九、一九一〇年ごろ南極に行つた人で、体の大きな立派な老人だが、月に一度はメルボルンに出かけて南極に関する意見を述べているそらだ。ジオロジスト、地質学者であり、一九一〇年代の探検をしてすぐ第一次の世界大戦が始つたのでその時代の探検の資料は印刷にされず一九三〇年代にはいつてその当時の調査探検の資料が整理されて出ている。これが今日の南極調査探検の基礎となつてゐる。

白瀬さんが明治四十五年か四年の冬にシドニーで越冬してゐた時白瀬さんを訪問し南海丸も見たといつていた。白瀬さんの探検は日本では虐待され、その成果が欧文化にされたのもごく最近のことだが外国ではよく理解されており、モーションと会つたのは豪州での最大の収穫だつた。

メルボルンではメルボルン大学山岳部のアニユアル・デイナリーまねかされたので毎日新聞が教材用に作つたマナスルのスライドを見せた。学校用のスライドだつたが、こちらは見なれていたので説明もすらすらと出来、集つた男女学生はとも喜んでくれた。このへんはタスマニヤに行くとき高くないが岩山もあり面白い山登りが出来るそらだ。ジャングルの中だとヘリコプターで食糧をこんだりして、プリーミティブなものらしい。

ニュージランドでは山を見るプログラムがないので、特に注文をつけプログラムをかえてもらひ四人乗りの小さな飛行機で山の頂を飛んだ。

今日ここに持つて来た地図はさつきも日高さんから非常に科学的だといふめられたが、三、四年前ブルックスがニュージランドの話をした時使つた地図で、彼はその三十分ほどの話にこれだけの準備をしていたので私が記念に持つて帰り、今日書庫からひきずり出して持つてきたのである。

ニュージランドの山といふのは雪と氷河の多い山で、最高はクック山で図抜けて大きい。飛行機でクックをまわり、東にタスマニ水河、西にフランソセフ水河が流れていてまさにオーバーストランドの山に似てゐると思つた。この上空を三時間半ばかり飛んでみたのだが私としては大いに意味があると思つた。飛行機には気密室などの設備はなく、ぐつと上り下りのはげしかつたので一緒に居つた内務省、ニュージランドでは外務省でなく内務省が接待してくれた一の役人など一週間も耳がきこえなくなつたとなげいてゐた。クックはかなり長い氷の尾根がつつていて日本ではこんない天気ならどこか人がいるものだが、さすがにニュージランドの山では冬のさ中にこんなところきいてくる者はないのか人の子一人見えなかつた。南海岸はパタゴニアのように氷蝕地帯となつてゐる。

ヒラリーの本を読むとヒラリーが最初に雪の山をみたのはシヤトIであるといつてゐる。日本ではこゝろしたところはちよつとないがインタラーケン山のピクトリアのような大きなホテルがあり、そこに似てゐたが、そこで針葉樹に雪がキラキラ光つて実に美しくつたと述べてゐる。エルミタージュでヒラリーははじめて山登りらしいものに頭をつつこみ、こゝでクックのトラバースを終えて帰つてきたベテランをみて感動したといつてゐる。日本からもパタゴニアに行

くようなつもりでニュージールランドの南の方に出かけたら面白いと思う。このことがちよつと新聞に出たら、帰国すると早速BOACからいつ日本の隊がニュージールランドに行くのか、行くなら是非うちの飛行機でいつてきた日には驚ろいた。寒さもそれほどではなく冬の真最中でもクックなど大したことはないようだ。

何しろあちらは南半球にあるので南北には気をつけていたが東西にはそれほど気をくつせず、やはり太陽は西へ沈むのだとはつと気がついたようなこともあり、南風は寒いということもなかなかピンと来ない。

ニュージールランドでクライスチャーチに最初についてみるとノーマン・ハーデーの訪ねてこいという置き手紙があつた。ハーデーはエヴァンスと共にカンチエンジュンガに行った男で、シエルパの村で半年ほどくらし「イン・ハイエスト・ネパール」という本を書いており、これは川喜多さんの本などと同じ民俗的というかそういつた面白さのある本だが、ついた翌日ハーデーを訪ねた。私はニュージールランドからの帰りの飛行機の中でお前の本は非常に面白かつたが、チャンとロキシンの話が沢山出てくるが、私はシエルパからすすめられる酒をどうすれば辞退出来るかということも書いてないとなパールに出かける気にならな

いといつてやつた。
ハーデーのところではパツカードにあつた。パツカードはテイルマンの本にも出てくるが、アンナブルナから外人としてはじめてラル

キヤをまわりブリガンダキに出る時テイルマンと一緒に旅行している男だが、彼もハーデーの晩さんに来ていて私は彼に例の学校用のスライドをみせたが非常によく喜んでみてくれた。ハーデーはカンタベリーの大学の地理、地質の先生で、日本山岳会で今度出した「マナスル」の第二巻を持出して、しかもその内容を実によく理解していた。特にうしろについている行動表は腰をぬかして驚ろいていた。英文をみてわかるころはくわしく読み、その全部をすいとろうという意気込みで読んでいた。あの本は世界のヒマラヤ文献として長く残るものと思うが、それがニュージールランドでもよく理解されており、ハーデーの驚ろきからもその価値があらためて認識されるのである。

クライスチャーチからウエリントンに飛んだ。ウエリントンにはリディフォードがおり、ニュージールランド山岳会の支部長をやつてゐる。彼も大男でその本にヒマラヤで河をわたる時大木をヒラリーと二人でわきにかかえて歩いてゐるのがあり、そういう技術を私はその本ではじめて知つたのだが、またヒラリーとピツケルを横に持ち渡渉している。ところがヒラリーやリディフォードのような大男なら水の深さは胸あたりですむがシエルパとならぶと水の中にもぐつしまうので駄目だと大笑して

いた。
オーランドでは発つ前の晩ヒラリーをたずねた。ヒラリーは養蜂場を営みオーランドの郊外に夫妻と小さい男の子と共に住み、近

くまた子供が生れるといつていたとなりはニュージールランド山岳会長をしてたローズ夫妻が住んでいた。ヒラリーの家にいつてみると島田君と訳した「わがエヴェレスト」と「マナスル」の第一巻が並んでいた。「マナスル」の二巻はなかつたがこれはこちらから送つていなかつたのだらう。ヒマラヤに関する日本隊のことは細大もらさず知つていて、チヨゴリザ登頂やヒマルチュリのこと、また昔のナンダゴートのことも知つており、彼もガルワルに行つたところがあるのであの山は実によい山だといつていた。例のマナスルのスライドをみせた後で、たのんで彼の南極のスライドを見せられた。フックスと握手するところまでのもので、ヒラリーは南極行について、ヴィゼルは大いにけつこうだが、クレバスに弱く、いやしくも南極大陸を歩こうとするなら犬は必ず持つていくべしといつていつた。ヒラリーの隊も犬を持つていつた。

写真でヒラリーをみると、山で不精ひげをはやしたもののばかりでいかにもむさくるしいが、町でみるヒラリーは如何にも若く立派な青年であつた。ハーディしかり、リディフォードまたしかり。ヒラリーと会えたのは特にうれしかつた。十一時すぎまで座りこんでお茶をご馳走になつたりして愉快にすごした。また豪州に戻ると来たコースで八月二十八日日本に帰つてきた。

前にもことわつたとおり山登り一つもして来なかつたのだが、ニュージールランドには山や探検な

どの好きな人間がごろごろしている。会えたらばと思つていて会えなかつたのは、ヘンダーソン夫人の前にダージリンでヒマラヤ登山の世話をしていたフレネックだつた。ヒマラヤの仲間ではヒラリー、パツカード、リディフォード、ハーデーなどと会つたのだが、はじめて会つたにもかかわらず昔からの知りあいのように思えた。

帰つてからニューヨークのオスカ・ハウストン、この人はK2に行つたチャールズ・ハウストンの親父だが、彼から手紙をもらつた。その手紙にはブライド・ピーク(チヨゴリザ)に登つた日本隊のお祝の言葉述べ、一九三六年の夏自分がカシミールに行つた時ブライド・ピークをねらつたフランス隊と会い非常にむさかしい山だということを書いたが、そのむさかしい山によく登つたという便りであつた。本場にマナスルやチヨゴリザの登山のねうちを知つてくれるのはやはりヒマラヤで苦勞してゐるヒラリーやハウストンやハーデーだということである。

(編者附記、本稿は九月十二日体協二階で行われた一八五回小集会講演の要点筆記で文責はすべて編者にあることをお断りしておきます。なおこの講演は録音テープにとつてルームに保存してあります)

図書係りより

長い間図書の管理が滞滞していましたが、夏からやつと渋滞の分が片付いたので、図書室業務の前進を図りたいと思つてゐる。
こんど図書委員制を復活し、望

月達夫、初見一雄、小林義正、岡田尚武、大貫良夫の諸氏に委員をお願いした。寄贈依頼、内容紹介、書評、整理その他全般に亘つて担当理事にアドバイスして頂いてゐる。図書担当理事は松丸秀夫、松田雄一である。図書室北東すみの書棚に新着書を入れるようにした。新着の書物はそこを御覧願ひたい。

図書の分類は和書はNDC(日本十進分類法)によつており、図書室の棚の位置も同じ分類に従つてゐる。本会図書室の書物の数はいくらでもないから、本を探すには書棚に貼つた分類によつて棚の中をのぞいて見るのが一番早い方法である。

洋書は今の所本会独特の分類法によつてゐる。図書の入手や維持については、やりようもあり、何とかやつてゐるが、気になるのは会員へのサービスである。

図書室で閲覧すれば問題はないが、もう長い間貸出し事務を停止して現在に至つてゐる。

貸出しはやりたのであるが、歴代図書担当理事の一致した御意見が「貸出しは無理である」となつていて苦い経験がいろいろと伝えられてゐるわけである。しかし他方、大英博物館が日本の昆虫学者に保存標本を送つて貸してくれた話が最近にもあり、私共も模範にしたいものだと思つてゐる。特に日頃サービスすることの少ない地方在住会員に貸出が出来るといふことになる。これを理想に考えてゐる。(松丸)

本会々長、工学博士別宮貞俊氏は九月十九日午前一時半狭心病のため東京都三鷹市牟礼八八二の自宅で急逝された。享年六十五才であった。別宮会長は富山県で行われた第十三回団体登山部門の会長として九月十三日東京発、十四日開会式および入山式にのぞみ、本部と共に弥陀ヶ原ホテルに入り、十五日評議員岩永信雄氏らと一ノ越から黒部川に下り、ダムを視察し、トンネルを抜けて大町經由宇奈月温泉に出て十七日閉会式に出席同夜行で帰京、十八日は平常通り理事長たる日本科学技術情報センターに出勤、夕刻帰宅されたが、その夜半逝去されたものである。

別宮さんの死を悼む

沼井 鐵太郎

昭和三十三年九月十九日午前一時半、突如別宮貞俊氏が狭心病で死去されたことを、日刊紙の訃報で知った。

それは国体登山地の立山から帰京されて二十四時間も立たない内の出来事であった。早朝帰宅の同氏は先行帰着した岩永信雄氏に電話されたそうだが、その時は格別に症状も訴えていらなかったようである。客観的にみれば、本会の会長として国体行事に出張し閉会式の間行われた宇奈月まで行つて国体山岳部門担当の本会代表者としての職責を完了せられ、あまつさえ最も愛好する立山黒部の山谷に眼の当り触れた後に、令夫人

である。

政府は二十日の閣議で氏を従四位に叙し、勲三等瑞宝章を贈ることをきめた。葬儀は九月二十二日午前十一時より四谷駅前聖イグナチオ教会で盛大に行われ、本会からは花輪をそなえ、地方会員を含む多数会員が参列、秩父宮妃殿下および印度大使から花輪が贈られた。葬儀後関係者による内輪の追悼の集りが開かれ、本会からは日高副会長、冠名誉会員、木津富山支部長、岩永、中田評議員が参加し追悼談をかわした。

氏は東京都出身、大正六年東

別宮会長の急逝

大電気工学科卒、通信省電気試験所をへて住友電工入社、社長をつとめた。日新電機、満州電線、藤倉電線の取締役、大阪レントゲン製作所会長、東京電気大教授、電気学会々長を歴任、大正十三年欧州留学中スイスに遊びフィンシュテラルホルンに登頂、大正末期から昭和初頭黒部峡谷の探査をはじめ、東北朝日スキー登山など多くのパイオニアの業績を残す。昭和三十年横濱の後をうけ日本山岳会々長、三十二年日本科学情報センター理事長、昭和三十三年ネパール、スイス、イギリス、米

国を視察。

令息等との家庭にあつて他界されたのだから、遭難死を道義的に極力避けるわれわれの主張からいって、登山家として或いは法にかなつた大往生といつてもよかつた。けれど山から帰宅後余りにも早く急変した御不幸は、特に御家族の方々に對して何とお慰めしてよいや、岳人でもない。本会として厚み満な人格、真底からの山への感情、すぐれた学識経験、学業界に広くわたる連繋と力量、それ等をもつと何等か健康のまま生かしてもらひたかつた。海外遠征、国体その他本会を通じて日本の登山界に確乎たる指導的役目を果してもらひたかつた。今や空し、横さんもつて退任された会長の後継者にわれわれが挙つて推したその人

は悲しい哉現し世を去られたのである。現段階の本会は飛躍充実に更に強化するべき重要時期に処している。故人に心労をわずらわしたわれわれには打つて一丸となつて君の靈氣に込め、甘えた心をひきしめてその実を挙げることに励進しなければならぬ。

私個人としては更に感慨深いものがある。二人の交遊は大正十年前後赤倉で東大のスキー合宿から始まつたと記憶している。しかし私が君の眼にとまつたのは、少し前本会の清水谷での小集会で私が小講演をした際であつたように聞いた。その話と妙高前山へスキー登山した際の私のリーダー振りの話とは、別宮さんが話し出されるには參つた。自分のことでは恐れるが、こと山に關しては、

別宮さんは先輩後輩の順を逆にしているも私を立ててくれた。飯豊でも、朝日でも、三ツ峠山屏風岩の最初の岩登りでも、かくして常によきアドヴァイサーとして企劃・先導の私を助けてくれた。私が大正十五年台湾に去つてからはトリオはデュエットとなつて積雪期の朝日は岩永氏と共に残る限なく歩き、冠さんを中心とする黒部・劍沢のパイオニア行には、同氏、岩永君、そして後には渡辺君などが常に加わつていた。別宮さんが變らず叔智のアドヴァイサーされたことに勿論、そのカメラ・ウォークは他の追隨を許さないものがあつた。

以上は単に別宮さんを語るほんの一節に過ぎない。山を通じ、また山を通じた日常の交遊に、私には別宮さんへの思い出が数々ある。それはいづれ機会を得て追悼記にまとめたい。今はただ哀切極まりない最初の痛撃で私の胸は一杯である。亡き友よ、乞う遙かにも幸くあれ。

別宮会長を偲ぶ

成瀬 岩雄

別宮会長はみるからに好々爺という感じの方で、電気界では誰もその令名は知らないものはない。その令名は知られていないようだが、日本山岳界の草分けであることは余り知られていないようだった。ましてこの好々爺が日本バラの花の会の会長さんまでやつていられるのを知る人もいたつて少いらしい。

別宮さんは一九一三年に那須岳の三本槍に登られてから山のとり

こになり、黒部川が今日のように俗地になる以前の大正のころ、すでに草鞋を沢山背負つてその谷々を探勝し、冠松次郎氏とともに黒部川の権威であつた。その後ヨーロッパの遊学は、横さんの紹介で、いまは時めくスイスの建設大臣ブラハンド氏とオーパーランドの山を歩き、二回目の諸歐の節はツエルマツト附近の山でスキーの旅を楽しんだ。そして昨年ブラバンド氏が訪日したとき、当時のスキーの旅のフィルムを写したり、佐久間ダムに案内もされた。またこの三月には要務をおびて欧米をまわつてこられたが、ヒマラヤを自分の目で見るとの念願とされた別宮さんは、役所で組んでくれた旅程だとヒマラヤに行くのが六月の雨期になるので、スケジュールを逆にして最初にヒマラヤに飛んで行き、ネパール国王に会つてマナスル隊が世話になつたお礼を述べるとともに、来春のヒマラルチュリ登山の許可証をもらつてきた。そしてその足でポカラやダージリンに飛んでヒマラヤ連峰の大景観を見て來られた。この話をさうであつた。

長男の貞雄氏は有名な作曲家であるが、「このごろどこへ行つても作曲家の別宮さんのお父さんと紹介されるのですよ」とまんざらでもない口ぶりであつた。マナスル登頂の推進力として大きな功績をおさめられたが、来春はヒマラヤに残された巨峰のうち最もむづかしといわれるヒマラルチュリ遠征を計画中の日本山岳会の総師として手腕を期待されていただけに

その急逝は惜しまれてならない。(九月二十日附毎日新聞神奈川版から転載)

北田さんの手紙

入沢 文明

北田正三さんが阿蘇で遭難されたとの噂を聞いたが、まさかと思つてた所、副会長の日高信六郎さんからその間の事情を承つて矢張り本当のことであつたかと哀悼の感にたえない。北田さんとは古くから交際を願つたというわけではなく、戦後鳥取県の大山国体登山に見えられてからのこと、時に書信の往復をしていたが、殊に丹沢山の国体登山では一緒に塔ヶ岳の小屋に泊り、終日一緒に山を歩きながらいろいろの面白い話を承つたりした。殊に私の興味をひいたのは、北田さんが中国関係殊に紅まんじ会の筋をもつておられるということ、私の仕事の方で必要ならばいつでも中共の方への連絡をつけて見ようと話された点であつた。

熊本県が国体と引受ける時は阿蘇が登山の舞台となるのだから一度出かけて来いと御勧誘の手紙を頂いたこともある。所が去る六月末突然手紙を頂戴した。全文を左に掲げる。

入沢先生 賢台

初夏の候御健祥にて御活動のよし、拙生も相変わらず元氣にて山狂の域を脱し兼ねています。先日岳会にて中共との合同登行の件御話し有之りしよし拙生は以前より西北地区新疆、西藏方面に一寸足がかりあり、曾つて

は南京大学の李教授と葱嶺にまで足を延ばしたこともあり紅まんじ会と五台山、ラマ本山等の関係も密接ですので一つ中共合同登行にだけは是非でも参加したいと敢えて申します。勿論個人の費用は自弁も苦しからず、何とか出る途は多々あります。以前別宮会長にもこれが実現について進言してをきましたし折井氏は私の中共関係をよく知られています。全く異つた途から中共とのトラブルを打開せなければ前途は真暗ですとの考えもします。

いづれ上京拜眉して
北田 正三

(六月二十七日附、原文のまま)
右様の手紙を頂いて、恰かも私が中共合同登山でも計画しているかのように思つておられるのではないかと実は当惑したのである。なるほど六月に花柳徳兵衛舞踊団が中国へ渡航してこの一行の副団長格で、私の中学の後輩であり山の後輩でもある越寿雄君が中共へ出かけて行つた。出発前越君と会話した際かねて成瀬君や折井君からもいわれていたので北京で西園寺公一君に会つた日本山岳会は中共内の登山を快して諦めてはいない旨を西園寺君を通じて中共当局に伝えて欲しい旨を依頼したことはある。そして右の依頼を越君に托した件を山岳会の役員会で報告した記憶はある。北田さんの御手紙は、こんな経緯を伝え聞かれて私が主謀者であるかの如き手

紙を頂くことになつたのであろうと想像するのである。いずれにしても私は右の御手紙に一寸当惑したのであるが、越君も、夏には帰京することであろうし、何か中共側のニュースでも聞いたらその時北田さんにはゆつくり御返事を差し上げましよう、筆無精をきめこんでしまつたものだ。

ところが北田さんの不慮の御遭難の次第を知つて私はまことに申し訳ないことをしてしまつたと後悔しても間に合わないのである。中共登山の熱情を胸に秘め、返事も抱きながら北田さんは阿蘇山に仆られたのであろう。

会報の誌上を拝借して私の非礼を北田さんの霊に御詫び申し上げる次第である。

近着外国山岳 会々報・年報

松田 雄一

当会もマナスル登山を契機として最近では、ますます国際的な会として認められつつあることは嬉ばしき限りである。この機会に当会の最近における海外の登山界との交信の様態を報告したい。最近とかくこの方面の報告がおろそかにされ外国図書を紹介なども十分でない、諸先輩より御叱りの言葉を受けているが、これを機会に今後はこの種の報告にも力を入れていく心算である。

大変前最が長くなつたが、本稿の目的は、外国山岳より当会宛寄贈載いた会報、年報類の解説なので簡単にとりまゝとめて紹介する。次号の会報からは、近着図書の書評も出来るだけ詳しく書くつもりである。これら会報、年報類はバックナンバーを整理し、欠号のあるものは補充する対策をこうし、逐次合本中である。

ドイツ山岳会年報

Jahrbuch des Deutschen Alpen-Vereins 1956 (Alpenvereinszeitschrift Band 81), München.

戦前のドイツ山岳会の年報は一九四〇年版、第七一巻まで日本山岳会の図書室にあるが、(もつとも一九三七年までは独逸山岳会年報一九三八年より独逸山岳会年報となつた)戦後は一九五四年、第七九巻から再び連絡がつき年報の交換を行っている。従つて第二次大戦期間中の五年間および戦後の一年間は休刊していたことになる。

B5版、ダック・クロース表紙のガッチリした表紙は戦前の年報と少しも変りなく、ドイツ山岳会の面目躍如たるものがある。しかも巻末には毎年附録として詳細な色刷の地図がつけられていて。一九五六年度の地図はオーストリア山岳会発行の二万五千分の一のレヒターレ・アルペン(Arbeberg-Gebiet)で実に詳細なものでスキー・ツアーのコースが豊富に入っており、これだけ見ても楽しくなる。

お国から巻頭記事を始めとしてアルベルグの山に関する記事が多いが、やはり何といつても収録されている四つのヒマラヤの記録

も奥美濃の盟主である以上どこかしらから登る道はあるだろうと軽く考えたのが失敗のもとだった。

八月八日、関西からの帰途、俄かに思い立つて地図を買い、リュックと地下足袋のほかには仕度らしいものは持たず、岐阜の駅前から樽見行のバスに乗った。(本当は能郷まで入るのだが最終の車だった)。樽見で一泊して翌九日、改めて能郷行に乗り継いで終点の白山神社前で下りた。弥宜を兼ねている村一番の山持の家で若い主人に山の様子を聞くと、全くお話しにならない。「残雪期においてなさい。それなら登れるかもしれない。今は笹がひどくて土地の者も行かない。昔は御岳詣りといつて村で草刈りに出たこともあったが近年は絶えていない。四月の大祭にも頂上へ登る者はいない」とのこと。

こと。それでは温見峠の道はどうかと聞くと、ここでは分らないから最奥の大原へ行って聞きなさい、と言う。落胆して三里の道をトラックの御厄介になりながら大原まで来て、その区長さんに山の様子を聞いてみると、意外にも、権現山ならここから登れるという簡単な返事。そのコースというのは後で調べてみると、以前に桑原武夫氏の登られたコースと全く同じであった。(山・昭和十一年一月号・能郷白山と温見)それは大原から温見峠の道を行き、途中で分れてオーゴの谷(地図の水無谷のこと、土地の人の呼ぶ水無谷は一つ手前の谷である)をつめて山頂に達するので、オーゴは水量少なく、滝もなし、尾根も切開があるから三角点へ出られる。これが最短コースだとのこと

だった。至極無雑作な話なのでもう登つたような気になつて喜んで、傍で区長の内儀さんが、とても貴方になんか登れませんかよ、と冷たい顔をした。

ともかく宿泊を頼んで翌十日、曇空を気にしながら早曉の道を急ぐと夥しい蛇である。道で会う宮林署の入夫が、草がひどくて登れるものか、雪消のとき来るといふなどと言ふので、それではやはり駄目かとまた心細くなつた。やがてオーゴの谷へ入つてみると、もとより道などあるはずがなく、身を隠すほどの大虎杖や蓬の間を分けてがさがさ登るのであるが、谷の広い割に流れが細いので、どこを歩いているのか別からなくなつてしまふ。二つ目の枝谷を過ぎたと思われぬ辺りで(一〇〇〇米位)暗い頭上に雷鳴がして雨が降つてきた。万事休す。先の分らぬ心細さから昼食もそこそこに退却をはじめた。途中宮林署の作業場を入夫が、登れなかつたらう、とわが意を得たように笑う。

上下して行く。一〇三一米の三角点まではなんとか判断していたが、それからが急に怪しくなつてきた。二夏の間には笹は伸び放題に伸びている。それでも何とか一四八一米の三角点まで頑張つてみたものの、木立の隙から覗く頂上は遙か彼方である。で、または退却、こうなるで里の蟬時雨までも阿呆くさく聞えてくる。

山登りでなにが面白くないと言つて、登山に無縁な村人に無理に頼んで泊めて貰い、好奇心目で見られながら滞在しているくらい、いやなものはない。仲間があればもう一度オーゴの谷を登り直してみよう気になつたかも知れぬが、天候も(土地の言葉で)ひじり(崩れ)かけている。

八月十三日、雨の中を蛇に攻められながら温見峠を越えて越前へ抜けた。お盆のせいで峠の道は草が刈つてあつて、道の有難味を感じ、少なうもここには人間の臭いがあつた。温見に下つて聞いて見ると、こちら側からも残雪期に学生が訪れるほか登る人は稀である。由、終戦直後、地図の測量が行われたときには良い道が山頂まで通じていた、とのことであつた。越前大野行のバスは果原から出ているが、回数が少ないのもう三里下つて中島から乗つた。

(付記)能郷白山は、美濃でも越前でも一般に権現山と呼び慣わしている。

さて会報もいよいよ二百号をむかえましたね。ついこの間といつてももう十五年も前になるでしょうが、百号特集号が出て、その時も早いものだと思つていたのにも二百号をむかえるようになって創刊の苦勞をさかせるようになったのも、うたた感慨無量というものです。同時に終戦直後の編集者の方々の苦勞を偲ばないではおれませんが、二十二年ごろでしたか、理事会が松方さんのお宅であつて伺つたこと、まだ急行の復活しないころでした。大垣で乗りついで、普通列車で、翌朝東京へついた足で、渋谷のどのへんでしたか覚えてませんが、塚本繁松さんの仮住居に立寄つた時お膳兼用の建や、室のあちこちに山岳や会報の原稿、そしてゲラ刷りが置れてあつたのが目に浮んでくるのです。食生活の非常に不自由な、そして落つかないあの頃にJACの歴史のために奮闘した人々の陰の力をじつと考えるのです。

生きていることは
崩れた高原の轍道を
防復することだ
と 遠い日の山波が
私にささやいてくれた

生きていることは
破れた幻影の夢
想を
尾行することだ
と 遠い日の星
津が
私にささやいてくれた

いま私の心を
完全に擁(よう)にしてしまつた
そして 私の眼の前に
通つているものは
空のない山だ
宇宙のない星
だ

植松清 一

生きていることは
幼い日の回想を ゆつくり
とりもどすことだ
と。

宿に帰つてしかじかと報告すると、区長は、それは惜しいことをした。もう少し辛抱して行つてみると良かった、と言つて今度は尾根筋を教えてくれた。なんでも二年前の春、宮林署で林班界の刈払機をしたことがあり、その後訴訟問題で裁判所の人を通つたことがあつて、距離は遠いが間違ひなく頂上まで行けるからと言ふので、測れる者は何とやら、それならばとまた性懲りもなく時間と労力を費す気になつたのは、われながら愚かであつた。林班界の切開だからどんな小さな瘤でも一々丹念に

二百号に寄せて
富田 健 一
九月三日の夜から酒沢行を予定

していたところ、十九号の台風の子報がはつきりしなかつたので、行先を変え、末の娘をつれて美ヶ原から蓼科を廻つてきました。四日はちよつとバラつきましたが、五日の午後から六日、七日にかけて台風がそれたので、六月以来の好晴というのに恵まれ、娘と共に大嬉びで美ヶ原の放牧地を歩きまわり、蓼科に入った昨日は午後から八手ヶ峰に登り、白樺湖に下り親湯に戻りました。

す。戦後において、本会創立の時
についての苦難の時期を迎えたわ
がJACが、木原、西堀、今西さん
らによりマナスルへの道を開き、
積さんによつて登頂に成功、つづ
いて昨今の華々しい海外遠征時代
を迎えるに至つたのであります
が、JACの歴史と栄誉を守つて
今後とも引つづき激しい、しかも
着実な活動を期待したいもので
す。同時に先輩の苦勞と努力の跡
を忘れず絶えず謙虚な気持をもつ
て登山界に対して貰いたいと思
います。

阿佐ヶ谷のお宅でお目にかかつ
た小島老とは幽明を異にしてしま
つた淋しさはありますが、武田、藤
橋、鳥山、藤島、別宮、松方、藤
木、三木、冠、中原、西岡、加納
一郎さんなどの指導をいただいた
大先輩たちのご健在を会報二百号
の発刊と共に心から嬉しく思う次
第です。(九月七日蓼科親湯にて)

飯豊山

藤島 敏男

「まだ今でも山に登りますか」
と、一八九六年生れの僕に訊く人
がある。六十才を少し越えた位で
山に登れなくなるほど消耗してい
ないから、この愚問には「ええと
きどき登ります」と返答するのだ
が「日本の山はもう大抵登りまし
たか」という愚問には返事のしよ
うがない。

山は穂高、剣、谷川岳、ほかの
山はあんまりというような好み
を持合せないので、ずいぶんあち
こちの山に登つたが、まだまだ登ら
ない山はいくらでもある。その中
でも、なんとなく登つてみたいと

気をひかれる山と、あまり登らう
という気の起らない山とある。

飯豊山は僕にとつて、年久しく
いつかは登りたいとおもつていた
山のひとつであつたが、ようやく
今夏その念願を果たすことができ
た。一行は昨年も早池峯、栗駒へ
一緒に行った川喜田壮太郎君(会
員)に、越後小出の伊倉剛三君(会
員)と井口拓夫君の応援を加え、
それに大湯の桜井文太郎、上赤谷
の井上栄橘と二人のポーターを伴
つた。おかげで川喜田君はスケツ
チブック一冊、僕も空身同様の身
軽さで歩くことができた。行程を
書いてみる。

八月三日夜東京発。四日上赤谷
滞在泊。五日飯豊川を溯り湯ノ平
温泉小舎泊。六日オーエン尾根、
北股岳、与四太郎池幕営。七日山
稜伝い大日岳往復、飯豊山直下
幕営。八日切齒尾根をヌクミ平に
下り小玉川温泉泊。九日長者原よ
りバス、米坂線小玉川口へ。
一回も雨にふられず、山上から
の展望、豊富な残雪、そして豊庫
という名に背かぬ高山植物の花々
が、地元の高校生大学生が主で混
雑というほどのことはなかつた。
こうしてこの広い大きな山を心
ゆくまでたのしみ、長いあいだの
懸案を解決したのに、僕は満足し
ている。

しかし、幕営ならば向う三軒両
隣りどころか、何十とテントが林
立してないとい物足りないという
人々や、身動きもできないほど山
小屋に詰めこまれないと山へ行つ
たような気が人々には、飯豊山は
推奨し兼ねる山である。
(一九五八年九月記)

朝日連峰新潟県側踏査

佐藤 一栄

磐梯朝日国立公園で、飯豊連峰
と並び称される東北地方の屋根朝
日連峰に、今夏新潟県側から初め
て一筋の登山道が切開かれた。
県と地元岩船郡朝日村の共同事
業で、道は三面村から三面川を遡
り、道陸神峰、大上戸山、相模山
を経て北寒江山と、連峰中央の県
界主稜へ尾根を通している。道程
は二十三軒で近い将来に三面川本
流の架橋、山小屋、指導標等の登
山施設も完備する予定である。

JAC越後支部では朝日村の要
請もあり、登山道開発を機会に連
峰越後側各沢の総合調査を計画し
県山岳協会及び新潟市の峽彩山岳
会と協議の上、藤島支部長監督の
下に五班三十六名の踏査登山隊を
編成し八月月上旬より下旬にわたり
各ルートのトレースを完了した。
朝日連峰は、山形県側が殆んど
開発され尽くして、登山者の受入れ
に万全の態勢を整えているのに反
して、その西面新潟県側は昭和二
十五年の国立公園指定以来八年間
何等の対策もなく、施設皆無のま
まに放置されていたもので、最近
まであの大きな面積を占める三面
川上流のぶなの大樹海の底では僅
かに三面部落民が、伝統の熊狩り
やぜんまい採りに山の幸を求めて
生活してきたに過ぎなかつたので
ある。従つて過去にこの地域を訪
れた登山者は数える程に少く、三
面川源流の各沢は殆んど未踏の領
域として岳人の視野の外にあつ
た。今回の踏査登山は、この知ら
れざる秘峽を地元岳人のパイオニ

アワークとして開拓するための第
一步であつた。

隊編成

- 監督 藤島 玄
- チーフリーダー 齊藤平七
- A班 末沢川 五名
- B班 岩井又沢 五名
- L 佐藤一栄 五名
- C班 相模尾根(本隊)
- L 山田一介 十三名
- D班 竹ノ沢
- L 小林智明 五名
- E班 以東沢
- L 加藤勝義 八名

調査要項

- 一、地形、泊場、水場、残雪の状
況及び登山コースとしての適否
を踏査記録する。
- 一、植物分布状態、野生動物の生
態、地形地質の観察記録。
- 一、毎日所定時刻の気象観測。
- 一、地元人により、山、沢等の通
称地名を正確に収録し、既存の
山道、狩小屋を確認する。
- 一、各班二台以上のカメラ及び必
要量のフィルムを携行して撮影
記録する。
- 一、ABCDE班は沢のルー図を作
製する。C班は登山道開発及び
山小屋、指導標の建設設置の調
査を行う。以上

行動概要

- A班 8月17日〜21日
村上駅〜三面〜末沢川遡行〜袖
朝日岳〜西朝日岳〜大朝日岳〜
平岩山〜徳網〜小国駅
- B班 8月14日〜19日
村上駅〜三面岩井又沢遡行〜中
俣沢〜西朝日岳〜竜門山〜寒江

山〜相模山〜道陸神峰〜三面〜
村上駅

- C班 8月14日〜17日
村上駅〜三面〜道陸神峰〜大上
戸山〜相模山〜寒江山〜大朝日
岳〜平岩山〜徳網〜小国駅
- D班 8月3日〜7日
村上駅〜三面〜竹ノ沢遡行〜中
俣沢〜北寒江山〜相模山〜道陸
神峰〜三面〜村上駅
- E班 8月14日〜17日
村上駅〜三面〜以東沢遡行〜以
東岳〜大鳥池〜血淵〜鶴岡駅
折から豪雨の連続で前半難行し
たパーティもあつたが、五班共に
全員無事故で各ルートを完登し、
資料を集めて踏査登山の目的を達
成した。

三面川源流の各沢は地元人もそ
の実態を知らず、予想通りの難コ
ースで、峻絶を誇る飯豊連峰の溪
谷にも匹敵し、将来は興味あるヴ
ァリエーションルートとして岳人
の視聴を集めることであろう。
相模尾根に切開かれた道は、踏
査の結果登山道として若干の不備
な点を補えば、景観に恵まれ、各
峰には良い泊場や水場もあり、申
分のない登山コースとなる。今後
は地元も積極的に整備宣伝するこ
となつた。

なお、踏査登山隊の行動記録及び
収集した資料、調査事項は今秋
発行の峽彩山岳会会報「岳神」に
特集して発表する。
ヒマラヤ委員会事務所 ヒマル
チュリ登山はいよいよ本格的準備
に入り、このほど千代田区須田町
二ノ三芝崎ビル二階(細野天幕
店隣り)(電25一六四〇)に新事
務所を設けた。

場合装備の点を補充することは無論のことであつた。同じ山のことではあるが貼り出されたタイトルによつて、質問の内容がずいぶん異つて来るので、この次からは装備を主とした相談所を開設し、地元の協力をあいまつてこれからますますふえてくる登山者の遭難事故を一人でも少なくしたいと思ふ。(安彦)

第十三回国体登山 報告

浜野 正男

本年度の国体登山部門は、北アルプスの岩峯である剣岳、立山を中心に行われた。今回までの国体登山と異なる点は、その舞台が岩場であり、雪渓であり、かつまた谷が急峻で激流であることである。黒部に落ちる剣沢の落差、立山川が早月川に落ちる落差は、今までの国体登山では経験したことのないものがある。

勿論剣岳中心の山々は穂高周辺の山々と比較される日本でも屈指の悪場といわれ、所謂山でのベテランはこの山々で練えあげられている。国体としてのコースの取り方には、多少の異議もあるろうが、止むを得ぬと考える。弥陀ヶ原、室堂を取り巻く山々に各コース毎に行動を起すときの雄大さは他には見られない豪壮さがあつた。

第一日(十四日)曇時々晴 第二日(十五日)快晴(登頂日) 第三日(十六日)豪雨、第四日(小雨、時々晴)

(剣岳池平) (第一日) Aコース 入山式―追分―地獄

谷―雷鳥荘泊

(初・大日岳)

第二日目 雷鳥荘―雷鳥沢―剣沢小舎―剣山荘―剣岳―剣沢小舎泊

第三日目 剣沢小舎―二俣―池ノ平泊(仙人泊)

第四日目 池ノ平―阿曾原―樺平―軌道―宇奈月―閉会式

Bコース 第一日目 追分―地獄谷―房治小舎泊

第二日目 房治小舎―雷鳥沢―剣ヶ御前―剣岳―剣沢―剣御前小舎泊

第三日目 剣ヶ御前―大日岳―称名小舎泊

第四日目 称名小舎―千寿ヶ原(電車)―宇奈月―閉会式

Cコース 第一日目 追分―みくりが池荘泊

第二日目 みくりが池荘―浄土雄山―別山―剣御前―地獄谷―雷鳥荘泊

第三日目 雷鳥荘―地獄谷―追分(電車)―宇奈月

第四日目 宇奈月―軌道―樺平―宇奈月―閉会式

(立山・立山川) Dコース 第一日目 追分―一の越泊

第二日目 一の越―浄土―雄山―別山―剣御前―雷鳥―沢房治小舎泊

第三日目 房治小舎―立山川―馬場島泊

第四日目 馬場島―宇奈月―閉会式

本会からは別宮会長、日高副会長、岩永評議員、松丸理事が参加した。技術委員長浜野常務理事、

チーフリーダーに沼倉寛二郎(東京)、山本朋三郎(静岡)、伊藤久行(岐阜) 浅野義左衛門(岡山)の四氏である。第二日目の登頂の日が快晴に恵まれたが、翌第三日目が相当の豪雨で、特に剣沢を池ノ平に下るAコースと立山川を下るDコース、大日岳を経て称名に下るBコースは雨中の行動で全くのずぶ濡れとなり困難を極めた。

Dコースは早朝出発したので、立山川の増水には幾分有利であつたようだが、剣沢を下つたAコースは豪雨のため出発の時間をおくらせたためか剣沢の急激に増水し三窓附近の渡渉点において、仮設の丸木橋から一名転落し負傷した。幸いなことに下流の洲に流れ付き額に負傷、両膝に打撲傷程度でこたなきを得た。他のコースは病氣負傷もなく無事に終了した。

一般的には各県の選抜だけあつてレベルは向上していた。ただし剣岳、立山を全く知らず初めての人がかなりいたようである。

特に雨のため用意不十分の点が見られたが、軽装備にて良しといつても雨具は夏、秋の山では防水完全なものを用意することだ。

技術面では、岩場に恵まれた県の者とか、都会で岩場の山に行く機会が多い県の者が優れていた。国体で多少対抗意識が出ていたように見られたが、岩場においてはこのようなことは考えぬこと。岩場をあまく見て、なめていた者もいたが、快晴で快適すぎる時はいいとしても一度天候が悪くなつたり、或いは一つのパーティの時にはこのような気持にはならぬであらう。体力は各県共に略々同じで

東京支部集會お知らせ

▽理事集會 十一月十九日
▽婦人部集會 十一月二十七日
去る九月十七日東京支部新人歓迎懇談会を開催し、毎月第一水曜日を会員懇談会と決定した。この集會は会員相互の親睦を計り、山行計画などについて話合ふ集いなのので会員各位多数出席の程を切望する。

二、三の県の者が特に優れていた。マナーは監督選手共概ね良好であり謙譲であつた。これは各々の山のグループが相互にいましめ合つて良くなつたものと考へて嬉しいことである。

リーダーシップ、チームワーク等も良い。特に温厚であり厳格なリーダーのところはチームワークも良い。

南の山靴とスキー用品

登山とスキー行に一番主要な役目を持つ山靴とスキー靴はミナミ独得の技術最高の材料で作つたものをお奨めします。

テント
スキーと山の服装
キスリング
サブザック

各種取揃



スポーツ用品

ミ ナ ミ
神田小川町中央角 TEL (29) 1359

登山用具の専門店

好日山荘

中央区銀座西一丁目
TEL 京橋(56) 3600



技術の講評は別に各チーフリーダーからの文章の報告があつてから正式の発表はするつもりである。今年は別表の如く特に良いところだけ選んで見た。

ただし一人二人が見て、短日間の間に見た目であるから或いはこの選にもれたものが、私の方が無いというかも知れぬが、悪いというのでないから諒とされたい。マナー、チームワーク、リーダーシップに優れた隊は将来必ず良い登山者が出てくると思う、技術、体力、装備は次の仕事であるからである。

団体成績表(特に優れたもの)

〔Aコース〕(装備)徳島、佐賀三重、岩手、埼玉(技術)佐賀静岡、愛知、和歌山(体力)静岡愛知(マナー)静岡、愛知、愛媛(リーダーシップ)静岡、愛知、愛媛(チームワーク)静岡、愛知和歌山、愛媛

〔Bコース〕(装備)山梨、茨城長野、山口、東京(技術)長野、岐阜、東京、群馬(体力)福井、岐阜、群馬、福岡(マナー)山口福井、茨城、長崎、東京、群馬、山梨、千葉(リーダーシップ)長野、山梨、山口、兵庫、東京、福井(チームワーク)山梨、兵庫、岐阜、茨城、長野、山口、長崎、福岡、東京

〔Cコース〕(装備)新潟、青森神奈川、富山(技術)宮城、広島北海道(体力)同程度(マナー)神奈川、青森、富山(リーダーシップ)神奈川、青森、富山、富山(チームワーク)新潟、富山、大阪〔Dコース〕(装備)熊本、京都(技術)鹿児島、熊本、宮崎、栃

木(体力)福島、高知、石川(マナー)熊本、栃木、宮崎、岡山(リーダーシップ)栃木、熊本(チームワーク)栃木、熊本、宮崎、岡山、滋賀

登頂のすぐ後に④

沼井鐵太郎

チヨール・オユール初登頂

チヨール・オユール(八一五三米)については、本会報一七四、一七七、一七八、一七九各号(吉沢一郎)、一九〇号(望月達夫)に紹介解説され、デイレンプルトの原著からの訳書「第三の極地」(諏訪多栄蔵・横川文雄訳、昭和三十一年十一月朋文堂発行)登頂者ヘルルト・ティッチャー隊長の原著からの訳書「チヨール・オユール登頂」(横川文雄訳、昭和三十二年二月朋文堂発行)も出版されている。

その初登頂はティッチャーのオーストリア隊、一九五四年のポスト・モンスーン期、十月十九日午後三時のことであつた。なおこの登頂には従来ヒマラヤ巨峰登攀には珍らしいことに、レイモン・ランベール、クロード・コイガン夫人等のスイス隊(ガウリサンカール失敗後転進したもの)と同時に同方面での接触というトラブルも起つたが、七千米以上はスイス隊の特権という譲歩契約が守られた何ら不快な競争にならなかつたのは大慶である。これはまた、今後起り得べきヒマラヤ巨峰登攀角逐の際の解決方途も示唆している。さて、十月十九日、まずサダーのバサン・ダワ・ラマが絶頂に

立つたようだ。第一回の試登の際に受けた凍傷で手の完全に使えないティッチャー隊長とゼップ・ヨラーを迎えに戻つて来た時、パサンのピッケルは雪にさしこまれそれにネパール、オーストリア、インドの国旗が翻つていた。以下ティッチャーの横川訳書の抜書きによつてその登頂を偲んでみよう。

「いつもは旗の愛好者でもないわたしも、自分の祖国と、わたしが心から愛し、また深い恩義を感じている二つの国を象徴する旗を眺めるとき、両眼に浮ぶ涙をおさえることができなかつた」

「パサンがわたしを抱擁する。彼の頬には一条の涙がながれて、これが烈風に吹かれて微かな氷の結晶となり無限の彼方へと飛びわたつた。パサンにとつて、頂上はわれわれにとつて考えられるよりもはるかに大きな意義をもつていたので。」(パサンはK2とダウラギリで願望の「非常に高い山」の登頂がもう少しの所で果せなかつた)「彼はあまりの嬉しさに口もききなないほどだつた。彼はすすり泣きながらいくどもこう繰り返すばかりだつた。▲頂上です、サヒブ、頂上です。▲頂上です、サヒブ、頂上です。誰はばかることのない涙である。われわれは抱き合い、接吻を交わす。三人が揃つて頂上に立てるとはなんと有難い俸せだつたらう!腕を組み合せて、われわれは最高点を指して進んだ」

「ゼップは、母から託された木製の小さな十字架を永遠の白雪に埋めた。パサンとわたしは、甘い菓子とチョコレートとを神々への感謝のしるしとして氷の中に埋めた。これはヒマラヤならどこへ行つても見られる儀式であつて、道の峻しい峠を越えた折にも行われるものである。いかにしばしばわたしはヒマラヤで、自分が伴つた現地人とともに、ツアンパヤヤ砂糖を心からの感謝をこめて烈風の中に投げたことだろう。わたしには、いまでも自分がこの古くからの習慣に従うことが当然のことと思われたのである」三十四年前日本アルプスの山案内や人夫達と一緒に山を歩いた頃、野宮の朝いた御飯の最初の一つまみを鍋ぶたにのせて、高みの方にささげ、山の神に祈つた風習も、どこかヒマラヤ現地のそれに通じるものがあるではないか。

「堅い雪の中に、わたしはピッケルで小さな窪みを作ろうとしたが、わたしは手はうまく動かない。わたしは止むなく跪かなければならない。数秒間はこのような姿勢のままだつたが——これが自分にあふさわしい唯一の正しい姿勢のように思われた——そしてわたしは、われわれ三人がみなそれぞれ流儀で唯一の神に感謝を捧げたことを悟つたのである」

「われわれは習慣になつて頂上の写真を取つた。この写真がこの日の出来事を証明する唯一のものであることを識つていたにもかかわらず、こうした写真を撮るのはほとんど気がすまず、いささか不機嫌にならざるを得なかつた」

ティッチャー等の滞頂は半時間であつたが、登頂感激は頂稜に達した途端に爆発し完結し、それが神への感謝法悦に昇華してしまつたようである。ティッチャーの叙述は精細流麗で、ヒマラヤ巨峰登攀の記録としては出色のものであるように思う。探検家であり、かつまた日本近代登山の勃興時代の先哲が示したような美しい紀行文家でもあつた。終戦後チベットに逃避して現地人達の中でつぶさに辛酸をなめたせいか、不自然でない東洋的な何かも感じられる。

すなわち、彼は最後の登高では「世界はかつて体験したことのないほどの善意に充ち溢れていた」と記し、「やがて訪れる成功を思う喜び——もうわたしは自分たちが頂上に到着することを確信していた——この喜びはべつにたいした役割を演じなかつた。頂上というものは、わたしの周囲にある諸々の事物やわたし自身と同じように、それほど重要でもあり、またさして重要でもなかつた。というのは、頂上も完全な全体の一部であるに過ぎないからだつた」とか、「この幸福な登高が、どれほど永く続いたかわたしは識らない」とか言つて、無我の境地、大悟の法悦にすでに入りつつあつた。本の挿絵の写真図版にも「頂上へあと一〇〇米の地点。われわれは疲れて一歩進むにも多くの呼吸が必要であつたが、同時になんともいいようのない幸福感がわれわれの胸を満たした」と附記されている。

推察するに、酸素器の補助もなしに八千米を登高し、その間苦痛感よりも遙かに遙かに立ち勝る幸福感を得たのは驚くべきことではあるが、ここに仮定を許してもらえらば、高所生理による夢遊病者の症状のあらわれではなかつたろうか。或いはまた、凍傷手当のための注射の影響ではなかつたろうか。しかし彼の書いた物に何ら妄想的な点がない所からみれば、正副交感神経のバランスがさして傾いたとも思われない。とすれば、山の比較的容易な登攀性、天候、隊の組成の小規模的適性と、その並々ならぬ登頂意欲、好シエルバ、スイス隊への顧慮とそれによる決意などの諸要素が加速度的にうまく行つて、不安が殆どなかつたことが、登頂感激がすでに登高中から始まつていたかの如き結果を生んだことになる。(一九五七年六月末日稿)

会務報告

九月役員総会 二十五日(金)

▽場所 本会図書室

▽出席者 日高、松方副会長
理事 折井、太田、徳久、大塚、山崎、村木、田村、田島、松丸、野田、越智、浜野、評議員 入沢、岩永、交野、成瀬、藤木、中田、渡辺、望月、津田関西支部長、藤島新潟支部長、山本静岡支部 監事 野口、諸岡、石原前監事

- ▽議事および報告
 - ①別項の如く本会々々長別宮貞俊氏は九月十九日逝去された。つつしんで哀悼の意を表す。
 - ②ヒマルチュリ登山の件、隊長決定までの段階に至っていないが、早急に具体化したい。(日高)
 - ③ヒマルチュリ偵察隊の動向報告 (松田)
 - ④第十三回国体報告(山本)
 - ⑤支部長会議は十月二十五日開催の予定
 - ⑥オニズカ・ヒマラヤン・シューズを日本山岳会検定の件(津田)
 - ⑦後任会長の件、後任会長決定まで日高副会長に会長代理を依頼する。新会長は近日役員総会で決定。
 - ⑧別宮氏追悼会の件、近日中に開催とする。
 - ⑨会報および山岳の件(田島、山崎)
 - ⑩ルーム改築の件(石原)

十月役員総会 十一日(土)

▽場所 ルーム

▽出席者 日高会長代理、松方副会長、折井、村木、田村、太田、

山崎、浜野、松丸、辰沼理事、監事野口、評議員成瀬、岩永、藤木
①臨時役員総会を十月二十五日午後一時から休協で開催、別宮会長逝去による欠員補充の件、その他右に附随する件につき討論。

第一八四回小集會 八月二十日午後六時から休協會議室で前インド大使吉沢清次郎氏の「飛行機から見たヒマラヤ」日高信六郎氏の「南米旅行談」があつた。

吉沢氏のスライドはネパール国王の特別機でポカラへ飛んだ際のマナスル、アンナプルナ山群の写真、ポカラからみたアンナプルナ連峰は素晴らしかった。ヒマルチュリ山の雄峰が角度を変えてその姿を見せたのが特に印象に残つた。他にカトマンズの戴冠式、スリナガル、スワートのカイバル峠など貴重な写真を見せていただいた。日高氏の写真は今年六月ブラジル移民五十年祭参加途次のもので、クスコのマチュ・ピクチュ、プレ・インカの遺跡等ポリビヤの写真がその中心であつたが、機上からのサルカントイの巨大な水の壁には圧倒された。ヒマラヤとアンデス、共に機上からの写真は素晴らしいものだった。(松田)

第一八五回小集會 九月十二日休協會議室で濱川、ニュージランドの旅行をおえて帰朝早々の松方三郎氏を迎えて「ニュージラランドの山登り」と題する小集會があつた。(別項参照)

☆御詫び 係の手違いにより小集會開催番号が本年二月七日の第一八〇回より左記の如く間違つて通知されておりましたので御詫びし訂正いたします。なお会報に掲載されている回数が正しい回数です。念のため。

訃報

- | | | |
|-------|------|------|
| 二月七日 | 一八〇回 | 一九八回 |
| 二月十八日 | 一一一回 | 一九九回 |
| 六月十八日 | 一八二回 | 二〇〇回 |
| 六月廿六日 | 一八三回 | 二〇〇回 |
| 八月二十日 | 一八四回 | 二〇二回 |
| 九月十二日 | 一八五回 | 二〇三回 |
- (集會係)

瑞西山岳研究財団グルトナー氏
スイス山岳研究財団ディレクター、オトマー・グルトナー氏(Mr. Othmar Gartner)は、かねて病氣療養中のところ、去る八月十七日逝去された。享年六十三才。

「Berge der Welt」編集に示された氏の業績は、広く内外の登山界より高く評価されており、その死が各方面より惜しまれている。生前、氏は特に当会に対して好意を寄せられ、昨秋の横氏の招待に際しても多大の便宜を与えられ、また「Berge der Welt」一九五八年版のマナスルの報告についても多大の御配慮をえていた。

同財団からの訃報に接し、当会では早速丁寧なる弔電を打電しておいたが、これに対し九月五日付同財団理事長フョイツ氏から左のようなメッセージが届いた。
当財団理事オトマー・グルトナー氏の逝去に対し早速丁寧なる貴会の御挨拶に接し、厚く御礼申し上げます。われわれとしましては、彼が始めた仕事を続けていくことによつて、彼の霊を慰めたく思つております。

九月五日
日本山岳会別宮貞俊殿
ガルツェンからのメッセージ
ヒマルチュリ登山先遣隊への参加を前に、八月二十四日付にてダイジリンのガルツェン・ノルプ氏から本会宛つぎのようなメッセージが届いた。
「拜啓、七月五日付貴信有難く拝誦致しました。この手紙により先遣隊に対する問題はすべて了解しましたが、御返事の遅れましたことを深く御詫び申し上げます。何分私は英語がいが手ですのでこの点に関しましては御寛容下さい。われわれは二、三日後に当地を出発してカトマンズへ向います。種々考えた末、秋は貴方の方がよく知っているラクパ・テンシンを同行させることにしました。先遣隊の金坂隊長からは手紙と電報を戴きました。幸にしてコンディションは上々ですので、金坂隊長に申し最善の助力を尽すつもりであります。日本山岳会の会員各位並に、私のことを憶えていて下さるすべての日本の友達に対し呉々も宜しく御伝え下さい。
右出発の御挨拶まで 敬具」
(松田宛 九月四日受信)

「日本の山々」カラー スライド作品を募集

当会では、約一二〇枚よりなるカラー・スライド「日本の山々」を編集することになった。これは会が国際的な会となつたために諸外国の山岳会との交際も多くなり、日本の山を広く紹介する必要が生じたためと、今また地域別にはまとまつたものはあつても

日本全国の、しかも四季の山を集めたものがなく、この機会に是非ともまとめておきたいためである。ついでには会員各位の作品を広く募集致したく、とくに地方の知られざる山の写真を歓迎するので奮つて御応募を乞う。作品の選択に関しは、別に編集委員会をつくりすすめるつもりである。

第七回トレント国際山岳祭

例年イタリアのトレントで行われる国際山岳祭(International Mountain Festival)は今年で七回目になるが、今年十月六日より十二日までの一週間トレントにて開催、第六回の同山岳祭には記録映画「マナスルに立つ」を出品し、シルバー・ロードデンドロニ賞を獲得した実績をもつ毎日映画社では今回も南米パタゴニヤ探検記録映画「大氷河を行く」を出品した。

本山岳祭に関し去る七月二十四日付イタリア山岳会、トレント山岳会委員長ブルノー・ピオント(Dr. Bruno Piendo)博士から、同山岳会の一部として行われる第一回ヒマラヤ登山隊装備国際展覧会(The 1st International Exhibition of the Himalayan Expedition)にマナスル登山隊装備の出品方を依頼してきたので、当会ではニューデリーに保管中であつた「マナスル登山隊装備展示用品」一式を同山岳祭に出品すべく、外務省を通じて発送方依頼した。

ア大会ネパール選手団歓迎会
五月下旬東京において開催されたアジア大会参加のネパール選手団に対し、休協の依頼をうけた当

寄贈図書

会では折井常務理事、松田理事が種々接待と案内の役をつとめたが、五月三十日午後七時より、当会と日本ネパール文化友好協会の共催にて麻布国際文化会館で歓迎会を開催した。特に同日は、吉沢前ネパール大使、粧谷元カルカッタ総領事、始め外務省関係者、日ネ協会関係者など四十七名が集り盛会であつた。六月二日夜は松田が帝劇のシネマ「世界の楽園」へ案内。三日には横有恒氏が小沢人形学院へ案内した。また会からは一行に対し絹スカーフ、扇子などを御土産として贈呈した。一行は六月三日夜半の飛行機で二週間の滞在をおえて帰国したが、選手のラム・クリシュナ・ベルマ氏(クリシュナ・パハドウル・ベルマ氏の実弟)は日ネ協会の斡旋で留学生として引続き残留することになり、奈良県の天理外語大へ入学した。

なお五月三十日の歓迎会の費用に關し日高副会長から特別の御配慮を得た。ここに重ねて御礼申上げる。

熊本支部新役員

熊本支部では九月二十九日前支部長北田正三氏追悼会を大分県竹田市で開き左記の通り新役員を決定した。

▽支部長三谷孝一▽常務委員西沢健一▽委員玉名金助、首藤宗利。事務所は従前通り熊本市行幸町一九熊本県庁登山部内。

(訂正)前号北田正三氏死亡記事の中、北九州支部長とあるは熊本支部長の誤りにつき訂正します。

編集後記

二百号記念特大号とした。ヒマルチュリ先遣隊報告、チゴリザ登頂など多彩なものとなつたが、はからずも別宮会長逝去の報をのせねばならなくなつたのはまことに悲しい。本号も大分遅れたが、出来るだけ定期に発行すべく努力したいと思う。なお次号に一五一号二百号の総目次をそえる予定である。(山崎)

寄贈図書

Österreichische Alpenzeitung Mai-Juli 1958 (オーストリア山岳会)
Jahrbuch d. Deutsch. Alpenvereins 1957 (ドイツ山岳会)
The Alpine Journal May. (英国山岳会)
Appalachia 1958
American Alpine Journal 1958. (米国山岳会)

第一八六回小集會

十月七日、ルームで六時より「ヒマラヤの気象」シンポジウムを行つた。パネル・メンバーに大井正一(中央気象台高層課)久米庸孝(同予報課)、村上多喜雄(気象研究所)、辰沼広吉(第三次マナスル隊気象担当)山田二郎(第二次マナスル隊気象担当)、藤平正夫(アンナプルナ隊気象担当)の諸氏。

①マナスル気象観測の体験。山田辰沼(三十分) ②秋のアンナプルナにおける体験。藤平(十五分) ③マナスル気象観測の結果。大井(一時間) ④ヒマラヤの地球大気に及ぼす影響。村上(三十分) ⑤ヒマラヤと天気予報。久米(三十分) ⑥討論會。

第一八七回小集會、十月二十四日午後時体協会議室で開催「黒部の今昔を語る」の演題のもとに冠松次郎、沼倉寛二郎両氏の対談があり、出席者との座談もあり盛会であつた。

会員計報

狩野精司氏(会員番号四六五〇番、仙台市原ノ町小田原)八月二十八日病氣のため逝去された。

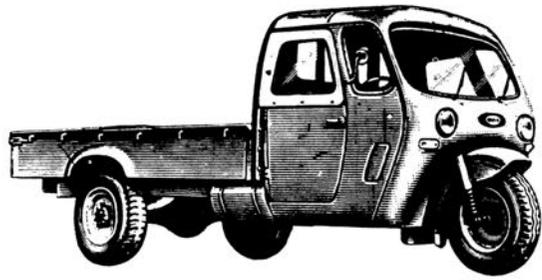
HOSONO
TOKYO

NYLON TENT
SKI & MOUNTAIN GOODS

SUDACHO, KANDA, TEL (25) 6428

昭和三十三年十一月廿五日発行
東京都千代田区
神田駿河台四ノ六
発行所 社団法人 日本山岳会
編纂者 山崎安治
頒価五十円
電話神田(25)八九五二番
振替口座東京四八二九番
東京都港区赤坂溜池五番地
印刷所 株式会社 技報堂

ゆったりした3人掛の運転席



乗用車と間違わないで下さい。3輪車でこんなにゆったりしているのです。しかも軽い丸ハンドルですから、長距離輸送でも疲れません。

- ・アンダーフロアエンジン
 - ・オーバーヘッドバルブ
 - ・A B型2 屯積
- 他に1 屯車の決定版とご好評を頂いておりますTR型がございます。

山なら絶対!!

オリエント

Hino 日野ディーゼル

も寄りの地区販売会社でご用命をお待ちしております